
蜜柑色の君

桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蜜柑色の君

【著者名】

N1162S

桜

【あらすじ】

初恋をしたことがない少女・ココロ。友達は皆恋をしていた。そんな「ココロに今までなんともおもつてなかつた男の子が急に気になり始める。何年も想い続ける一途な女の子の恋のお話。

o n e s i d e d l o v e - 1 中学生（前書き）

前から書きたかった蜜柑色の君！

ついに投稿です！

あらすじでは「ん？」と思つかもしませんが実際は「ゴチャヤゴチ
ヤ」です。
ではどうぞ！

one sided love -1 中学生

あなたは誰かを好きになつたことはありますか？

想いを伝える勇気はありますか？

きっとほとんどの人が無理だと思う。

けれど想いを伝えたならば、あなたにはそれだけの勇氣がある。
傷付くのを恐れない人はきっと強く、美しいんだよ。

私はあの人出会い、たくさん涙したし、たくさん笑了。
辛かつたし、切なかつた日々もあつたけど後悔はしません。
恋をする……それだけで人を信頼するという勇氣がいるんだから。

——初恋の相手があなたで良かつた…… —

「髪の毛よしー制服ぱつちりーうん、大丈夫かな

私は鏡で上半身を見て、目立つところがないかチェックする。
少し髪の毛がしつぽ頭になつたので手のひらで軽く頭を押さえ付

ける。

いや、押さえ付けるところより、おいているところの方がいいのか
もしれない。

これは私の癖だ。

「用意できた? お母さんはできたけど」

「うん、私もできた! 時間はまだ早いね」

私は時計をみてまだ時間があまつていた。 今日から新しい季節
……暖かい春の始まりだ。

「今日は中学校の入学式ね。 誰と同じクラスになるのかしらね。
ねぇ、□□口?」

私は……□□口と呼ばれて母親の方を見る。 私の名前は□□口
だけ少し変わった名前だと思つ。
理由は『他人の□□口が考えられるよつ』といつせられた。

「私は……誰となつてもいいよ。 なりたくない人もいるけどね」

母親はそう、とだけ言い、しばらく沈黙が続く。

「あ、こんな時間。 もう行かなくちゃ!」

私は時計を見てはつとする。
急いで靴をはき、通学カバンをもつ。

「お母さん、早く~」

「待つてーお母さん歳やから……」

はあ？ と少し呆れるけど突っ込んでいる暇はない。
でもこの母、いつも「私はまだ若い！」とか言つてるんだよ？それが歳？なんだこの母親！…と思つ。

私は待つてられなかつたので、ドアを開けて、廊下のよつな細長いところにエレベーターのボタンを押す。

私の住んでいるところはマンションでまあまあ綺麗だと思つ。階段もあればエレベーターもある。

母を待つている間とエレベーターがくるのを待つていた。

「ハ、ハハロは早いわね……若いつていいわね」

ぐるっと後ろを向いて母に一言だけ言つた。

「遅い」

また、沈黙が続く。ちょうどいといところにエレベーターがきたのでよかつた。

エレベーターにのり、一階までつくるを待つ。
すぐについた。

外に出ると、春の生暖かい風が髪を靡かしてくれる。
ブレザーを着てるから少し暑いけどシャツは案外薄くて寒そう。
学校につくと校門に誰かたつている。
男の子だらうか？男子の制服を着ている。

「おっ、星野ーー！」

「あ、ぬりちゃん!…ひしゃぶりだね!」

校門にいたのは同じ学校だった音無 ルイ だった。
ルイとこう名前だが、みんなルイのことをぬりちゃんと呼んでい
るから私もぬりちゃんと呼んでいる。

星野といつのは私の苗字。

「ぬりちゃん、男子の制服なんだ? 女の子なのに」

ぬりちゃんは苦笑する。
ぬりちゃんは外見は男の子に近い女の子で、ショートカットの髪
に少しほつちやりしている。
でもぬりちゃんは心は男の子らしい。
だから男の子っぽい言葉遣いになるみたい。

「ん? 星野、また髪のびた?」

ぬりちゃんが私に聞いてくる。

私はこくんと頷いた。

私の外見は少しぬねていて長い髪に茶色っぽい瞳。
体はやせている。

髪は少し茶色がかかつたぐらいで長い髪は少しの血塊だ。

「クラス表みたか? まだなら見てこよ。俺はこいで待ってる
奴がいるからや」

「うん、そうある。ぬりちゃん、またね

私は手をふり、クラス表を見てみる。

「わ、六組だ！ん？美咲と千恵は違うクラス！？ええ……」

クラス表を見てがっかりする。

小学校の時から仲がいい美咲と千恵は違うクラスだったから。

「いいじゃない、新しい友達つくれば」

「うん……やつだよね……」

私は六組の列に並ぶ。

その時に声をかけられたので振り返ると真琴がいた。

「ハハローーひせしづりーー！」

真琴…………富内　　真琴は同じ学校だった人で、肩までつく髪に少しほつちやりしている。

でも、可愛いと思いつ。

「み、 富内　　真琴ーー！」

「…………どうしてフルネームなのかなあ？」

小動物みたいで可愛いけどな～。

「なんとなく……かな？エヘヘ？」

真琴が頬を膨らませる。

「もひー別にいいけど……でも新しい学校の人ってなんか……おびえちゃうね……特に女子……」

真琴がなんだか変?

私はおびえるというより、緊張するよ……。

「私は不安だなあ。友達できるか……私、人見知りだもん」

真琴はああ、とだけ返事をしてニーンマリと意地悪な笑みをする……。なんだらう、嫌な予感が……。

「『』『』ロは人見知りだもんね~。初めてあつた人とか、そんなに仲良くない人と喋る時なんかのすゞくおどおどしてるもんね?」

「……仲がいい人だったら、本当の自分でいられるんだけどね……」

私はテンションの低い声で言った。

だつて、仲がいい友達は違うクラスだもん!!

私はふうっとため息をついた。少し自信がない。このクラス（六組）で友達ができるか。

「じゃあ、並びましょうか」

真琴がからかうような、楽しんでいるかのような声をだす。
ひ、ひどいー!

並んですぐに体育館に行き、先生達の挨拶、校長の話で、その後各クラスに移動した。

今、六組の自分の机に座つて、先生の話を聞いている。

「初めまして！このクラスの担任の 工藤 鈴 です。
担当科目は国語です」

工藤先生は女教師でまあまあ綺麗な方だ。 声も透き通っていて
綺麗。

「初めまして、このクラスの副担任の 中山 聖 です。
担当科目は理科です」

中山先生は男教師で顔は普通だなあ。

「では皆さんにも自己紹介をしてもらいます。一番からおねが
いします」

「俺かよー？えと……………です」

みたいな感じで始まった。

私は二十六番なのでまだまだだと思っていたけど、すぐに私の番
になつた。

「ほ、星野 ハロです。よろしくお願ひします」

私の自己紹介は終わり、後ろを向くと真琴がいた。 私の次が真

琴なんだ。

「富内 真琴です。よろしくお願ひします……」

真琴はさつさと済ませて、ガタンと音をたてて座った。少し、落ち着いた……。

全員の自己紹介が終わって、さよならの挨拶をした。私は通学カバンにもらつた教科書をつめて、靴に履き替える。ここは学校では上靴で、学校に行くときや帰るときには運動靴に履き替えなきやいけない。 体育はグランドだつたら運動靴で体育馆だつたら上靴らしい。 当たり前だけだ。

「美咲と千恵は四組か……廊下で待つてよ」

駆け足で私は四組に向かつ。 待つてる間暇だったのでミニーフラス表を見る。一瞬、時が止まつたような感覚がした。

——大西 穂——

その名前を見ただけでチクン、と胸が痛む。 穂も四組だつたんだ……。 会わせる顔がないよ……。 だつて、私は一度穂に——

「ハハロー……ビーフしたの? ポートヒート! ——」

私は考えるのをやめて、声のした方を向く。 大体予想はしてゐ

んだけどね。

「千恵か…… 美咲は？」

「美咲なら、まだ教室にいるよ」

美咲、おいていかれたんだね……。今、私の目の前にいるのは千恵。武内 千恵。外見は髪をポニー テールに結ついて、鋭い目、明るい性格かな。

「待つてよう～！千恵は早いんだから～」

美咲が来た。佐藤 美咲はのんびりした性格で髪はストレート、目は大きく、体重は普通。

「帰ろつか……！？」

誰かとぶつかつたのでぐるっと後ろを向いて相手を見ると……そこには……大西 棗が！？

「なんだ、星野かよ！」

「大西！？ぶつかって悪かったね！」

私はそれだけ言つと大西を無視した。千恵はクスクス笑つている。私、笑われるようなことしたかな？

「ココロ、大西だけは惚れちゃだめだからね？」

はあ？と思いつつも黙つて頷く。実は私と大西は小学校の時に

両想いとかいう噂があった。勿論、嘘だよ？

「そういうえば、一人の初恋の相手は誰？」

美咲は顔を真っ赤にしてモジモジしてから言った。

「リ、リク…… 杉村 リク。今も好きだよ……」

美咲の後に千恵が言った。

「私は元カレだな。口口口はまだ初恋をしてないんだっけ？」

「うん。初恋……恋ってどんな感じなのかなーって思うぐらい」

私はこの時知らなかつた。私の初恋の相手はすぐそこにはいることを……何年もその人を想い続けることを……。

o n e s i d e d l o v e - 1 中学生（後書き）

蜜柑色の君は思い付きで書いてるので更新は早かったり遅かったりと不定期です。
けれど大体最後は決まっているので最後までよろしくお願ひします！

one sided love-2 クラブ体験（前書き）

テーマは「恋」なんですがまだまだテーマは書かずにだらだら書いてます。

だらだら書いていてもちゃんと恋と関係あって進んでいるので大丈夫なんですが問題は自覚なんですね。

one sided love-2 クラブ体験

朝。

目覚し時計が耳元で騒がしく鳴るので布団からもぐもぐと手を伸して力チツと小さな音をさせて時間をみる。

少しねぼけている私は目をこすりながら制服に着替える。時間はきつちりとした7時。

歯磨きをして、髪をととのえ、制服についている「」をなれたでつきで落としていく。時間にまだ余裕があるので食パンを手にとり私の大好きなチョコレートをぬつてぱくりと食べる。

飲み物は何にしようか迷う。

牛乳はアレルギーで飲めないし……。

考えた私はオレンジジュースにした。

オレンジは好きだ。

私は千恵が迎えにくるのを待つ。

昨日の帰りに千恵が私を迎えてきて、そのあと一人で美咲を迎えていくという話をした。

私と美咲の家は中学校に近いけれど、千恵は遠い。
だから徒步で私の家にくるには三十分ぐらいかかる。
いろいろ大変なんだよなあ、千恵って。

そんなことをぼややんと思つていたらインターほんの音が家のによく響く。

きつと千恵がきたのだろうと思ひ、私は鞄をもってドアを勢いよくあける。

あけた途端に千恵の「あーー」とこづ驚いた声が少しだけ聞こえたような……。

「あ～、ビックリしたあー！」「ロロ、ほしゃぎゅうじやない？」

「だつてー夢にみた中学生なんだよー？楽しまないとねー。」

私は鼻歌を交えて軽々と美咲の家についた。

美咲の家は少し花が植えてある。

なので春……今の季節は蝶が花に舞っている。
心癒されるから好きな場面。

千恵が美咲の家のインター ホンをおす。
だけど何の応答もないのでもう一回おそいつとすると美咲がでてきた。

美咲はのんびりしてるので遊ぶ時も遅れることが多い。
そこが美咲の好きなところでもあるんだけど……。

美咲は私と千恵の姿を確認すると安心したように笑んだ。
そして学校の門をくぐる。

美咲の家は中学校に近いから歩いて一分でつべぐらい。
羨ましいと思つ。

そんなことを思つていたら美咲が私に聞いてきた。

「『ロロー？聞いてる？』『ロロはノートもつてきた？』

ノートへ。どうして？…………あ！そつだ、今日から初授業なんだ。
ノート……いるよね……。

忘れたあー！

そんな私を見て千恵は大体予想がついたのだろう、鞄からノートを一冊取り出し、私にわたしてくる。

「口々口の」とだから忘れたんでしょ？あげるよ。一冊だけなら

「

それは大学ノートで緑色の綺麗なノート。千恵はいつも私を助けてくれる。

千恵は私の親友だ……。

美咲もだけどね！

いろんな話をしていたらもう教室の近くまできていた。

まだ話したいなあ、と思うけどしうがない。

一人に手をふって教室にはいようとすると美咲が私に言った。

「休み時間になつたらいくからね～ だから休み時間まで我慢だよお？」

につくりと笑い、美咲は私の頭をよしよしとなる。

うう……なんか私だけが幼い子供みたい。

私は美咲にありがとう、といい教室にはいる。はいつた途端、誰かから声をかけられた。

「おはよおー！確か……星野さんだよね？」

「は、はい！？ほ、墨野ですか……」

その女の子は少し長めの髪に綺麗な顔、なんていつか……もてそ
うな女の子。

……この人は柴崎さん。

11のクラスで少し目立っていたから名前もすぐに覚えた。

「やだな！そんな敬語はいらない！タメでいいよ？」

「人見知りなん……。じゃ、じゃあ」

私は逃げるよに席についた。

柴崎さんはにやりと笑っていたような感じがある。

私はふう、とため息をつく。

こんな人見知りじや、友達をつくるのが難しい。

いや、できるかな？

私はどうしようもなく不安になる。

そんな気持ちのせいかもう先生がいて、朝礼が始まる。

「田直は一番からです！男女ペアでやってもらひのどー番と二
番、おねがいしますね。日誌は前にあります

一番と二番が前にいつたと思つたら二番の女子は笑つており、一
番の男子は恥ずかしそうにしていた。

「げえー！お前とかよー！」

「何よー？私だつてね、あんたとやるのは嫌なんだからねー！」

仲がいいんだな～。小学校が同じだったのかな？

中学校には違う小学校だつた人が沢山いるから知らない学校からきた人は誰なのかわからない。

……でも、男子と一緒に日直をしないといけないのは嫌だ。

私は……男の子が苦手。

こわくて、乱暴なイメージが強いから。

気がつくと朝礼はおわっていたようで先生の説明が始まっていた。

「日直は日誌を書いてもらいます。書き忘れたりしたらやり直しなので気をつけて下さいね。授業はほとんど受け方の説明だと思います。では頑張って下さいね」

そう言つて先生は教室をでていく。

入れ違いで英語の先生がはいつてきた。

そしてファイルを配つていぐ。

「そのファイルは授業で配るプリントをとじてもうつためのものです。なくさないようにー配られたら名前を書いてくださいー！」

私はファイルに名前を書く。

そしたら隣の男の子が話しかけてきた。

「へえ、ハロロかあ！いい名前だね」

「あ、ありがと～」

優しげに微笑む彼はなんだか素敵で。すぐにおとなしいな、と分かった。

私と同じ茶黒の髪に少しだけはねてるしつぽ頭。ほんのりと赤に染まっている頬。にっこり笑うとかっこよわそつな顔。全てがととのつた人だ。

黙つてもきつとカツコいい。もてるだらうな~。

しばらく先生の話を聞いてチャイムがなる。私はやつとおわったと思い、廊下の方をみる。まだ、美咲達はきてなかつた。
どうしようかな……。私、このクラスに友達いないし。知らない人ばかり……。

……このクラスになじまないといけないのに、なじめない……。
凄く孤独に感じる。
おねがい、はやくきて……。

「…… ハッ ハロー―――聞こえてるー? ハロー―――」

私は顔をあげる。
真琴がいた。心配そうに私を覗き込んでいた。
真琴が私に何の用だらう?

「さつきから美咲がいるの。ハロをよんでもほしいと頼まれて
ね」

「真琴は?誰かと喋らないの?……友達とか」

私がそういうと真琴は苦笑した。

「んー……私、このクラスで仲のいい人いないから。それに一人の方が乐じやない? 女子なんか……裏でねちねち悪口言つしさあ」

それは私も思つた。女子は男子のいるところでは女らしくするけど、裏では下品な人が多い。男子がいないと女らしくないんだよなあ。でも、裏表のない人もいるけれど。本当は、男子より女子の方がこわいのかもしねない。
だから私は男女嫌いだ。

「そり……真琴、ありがと。じゃあね」

私は廊下にいく。

美咲達を長くまたせるとなんだか軽く怒るような気がして。

廊下にいくと美咲がふあー、とあぐびをしていた。
千恵は私を軽くバシバシとたたいた。

「ココロ、ぼーっとしてるー。じつはそっちのクラスは? いい人いる?」

「それがね、気の強い女の子ばっかで。真琴以外苦手かも。……でも男の子では隣の席の人とか! ジー! 優しそうないい人……かな」

私は教室にいるその男の子の話をする。

千恵は羨ましい、とか言つてた。

私はなんですか?、と思う。

まあいいか。

「今田さあ、クラブ体験だねえ？」「口せどい」を体験しにいくの〜？」

え？ クラブ体験なんかあつた？

話、きいてなかつた……。

私はうーん、と考えるじぐわをして少しうかんだクラブがあつた。

「び…… 美術部は？ 絵を描くの好きだし。楽そうだし！ 帰宅部でもいいな」

「そうか〜。口せどは美術部かあ！ 私も美術部にしようと思つてたんだよね。よつしー三人で今日体験しにいこつか！ いいよね？」

口せど、美咲？」

私は「ぐぐぐと頷く。 だつて三人の方がなんか安心するから……。

辛いことも頑張れる……から。

チャイムがなり、私達の声は打ち消されかわりに先生の声が響いた。

またね、と教室にもどつていぐ一人をさびしく思いながら私ももどる。

席につくと隣の男の子が私をじつと見る。

なんだろ、と思いながらも気にしないふりをする。

すると隣から聞こえないぐらいの声で「やっぱり可愛いなあ、凄い好みだ」と聞こえた。

なんのことだらう？

終礼をしてすぐに美咲達と会流し、美術部のところへいく。
ドキドキしながら美術室にはいるとツワツワの髪を結った清楚な
女の子がきた。

「体験にきたのね～？あ、この子可愛い！」

そういうて私にだきついてきた。
え……なんか想像^{イメージ}と違う。
もつと……控え目だと思つてた。

「こりゃー困つてるでしょ！あんたはもう可愛い子ばかりだきつ
いてー」

奥の方から背の高い美人さんがくる。
なんか……個性豊かな人達だな。

体験もおわり、帰る時間になつたので千恵と美咲と喋りながら門

に近付くと男子バスケットボール部がまだやっていた。

特に気にすることなく男バスをよけて門をくぐりついた。
あ、男バスって長いので短くしただけだよー。

「きめちまえーー！」

そう叫ぶ声が聞こえた。
私は思わず後ろを振り返り今……ショートをいれた人をしつかり
とどけた。
するとまるで——時間がとまったような感覚がした。
私に何があきたのか分からぬけど……『彼』から目がはなせなくなっていた。
そこにいたのは……あの男だから。

one sided love-2 クラブ体験（後書き）

問題は自覚と前書きに書きました。

それは主人公の「コロガいつ恋をしたか自覚した途端恋になりました。

そのへんではまだまだ自覚はできないんじゃないかなー、と思
います。

one sided love-3 彼の笑顔（前書き）

次話からは夏にする予定です。
すいません、季節外れで……。

そしてココロと棗の絡みがあるかな、と。

全然絡みがないので、二人の絡みが書けるのはある意味貴重なん
ですよ！

そして重要な人物も少しづつ出て来ます。
ココロの隣席の男の子の名前はかなり考えました！
気に入ってくれたら嬉しいです

one sided love-3 彼の笑顔

大西……。あの男があんな綺麗な笑顔、出来るの？今まで見たことない真剣な顔。

シユートが入り、嬉しそうにしながら友達と肩を組み、ハイタッチしながら喜ぶ君。

何時間していたのだろうか？服は汗でびしょびしょだ。

私は、初めて君の笑顔を見たよ。君でもあんな無邪気に笑うんだね。

そしてどうしてだるい？今、私の鼓動がドクン、ドクン、と高鳴る。

胸がきゅっとしめられた感じがする。
けど苦しくなくてむしろ感じたことのないくらい緊張して、ドキドキする。

感じたことのない、変な気持ち。

なんだろう、この胸の騒ぎは。名前があるならどんな名前？

何の感情？

どうして君から目が離せないの――？

「……『口口口』どうかしたの？誰を見ているの？」

千恵が心配そうに私を覗き込む。

私は恥ずかしくて顔をぱつとそっぽむいてしまう。

千恵はニヤリと意地の悪い笑顔をして、私はなんだか千恵に全て見透された気がして、顔をあわせるのが嫌になる。

「大西を見てたね？あれえ？『口口口』の顔、頬が紅いぞー？」

「そ、そんなことない！暑いだけ！」

暑くはなかつたけれど、今感じた胸の騒ぎはなんだか言えなかつた。とても嫌な感情のよつた気がしてーー。

私は夜も中々寝付けずにいた。

頭では寝ようと思つてゐるけれど大西の笑顔が何度も繰り返し思ひ出しては胸が高鳴る。こんなのがつして?なんであいつにあいたいと思つの?おかしいよ、こんなこと今までなかつたのに……。

学校でも寝不足だ。千恵からは「大西が気になる?」とからかわられるし……。

ため息を軽くして席へカタンと座る。

隣席の男の子はまだ来ていなかつた。

どうしようかなあ、と考えていたら後ろからついつんと制服が何かに触れる。

予想をしつつ、後ろを見ると予想通り真琴がシャーペンを持ち、「口つと笑つっていた。

「今日の口つと、何か悩んでる気がして。何か役に立てればいいな、と思つたんだけど……」

真琴は照れくさそうに頬を紅色に染める。 真琴なら言つてもいいかもしない。

真琴は誰にも言わなさそうだしね。 それに真琴なら知つてているかも……。

このわけのわからない気持ちが。

私は真琴にそのことを話した。

真琴はうんうんと分かつたように手を組む。

私は期待をこめて真琴を見る。

その時言つた言葉は信じられなかつた。

「それは『恋』だと思つよ? 分からないけど一目ぼれじゃないかな? 一目見て惚れるつていうあれ。見たことない棗の笑顔に惹かれたんだね」

「そんなはずない! だつて……だつて、見たことない人の笑顔だつてあんな気持ちにならないもん!」

私は真琴の言葉を信じられなく、いつも人の意見に流されるのに今回だけは納得したくなかった。

否定したかつた。

真琴はやれやれ、と呆れたように私を見つめ、その目には「まだ認めないか」という意味が込められていた気がする。

私はそんな真琴の瞳^めから逃げたくて目をそらした。

タイミングよく先生が教室にきてくれて朝礼が始まる。

朝礼が終わると真琴は隣席の男の子と喋つていた。 安心しながら教科書を机に置くと私の隣席の男の子がじつと見る。
そして話しかけ、優しく微笑む。 この人は優しい人だな。

「星野さん、悪いんだけど……教科書忘れちゃつてさ。見せて

く
れ
な
い
?」

私は出来る限り笑顔をつくり、うんいいよ、と頷く。

その男の子はありがとうと笑いながら真ん中に置いてある教科書をパラパラとめくつっていく。 そういえば、私この人の名前知らない。 なんか聞きにくいなあ……。

「槙野 隼人。僕の名前。知ってるかもしれないけど」

先まで教科書にあつた視線が今は私をとらえる。

カツコいい顔がしつかりと私を見て顔が熱くなる。

真剣 そうな瞳。 目を逸らすのがなんだかもつたいないくらい。

私は急に恥ずかしくなり、ぱつと目を教科書に向ける。

教科書を見やすいようにか手が教科書にのつてあり、凄く見やすい。

なんか紳士のように優しい。

他の女の子にもこんなに優しいんだろうな。

何か……モヤモヤする。 今日、変なもの食べたかな?

なんか気持ち悪い感情。 隼人は「意地悪しすぎたかな」と

苦く笑う。

どんなことを意味するのか分からなかつた。

隼人さんがどんな気持ちだつたのかも……。

休み時間になると教科書を私の机に優しく置くと次の準備を始めた。

はあ、と悩みがあるわけでもないのにため息をついてしまつ。

心配したのか隼人さんが顔を覗き込む。
すつごい顔が近い！！

「隼人～？何してんのよ？星野さんが迷惑してるじゃん！」

「柴崎？……あ、ごめん！迷惑だよね」

柴崎さんは隼人の机に手をつき、まるで隼人さんを狙っているような感覚。

仲が良いのかな……。 柴崎さんは隼人の腕を引っ張り、廊下へ出て行く。

「またかあ～！柴崎が隼人狙ってるよお～！いくら小学校が一緒で友達だからってえ！隼人は皆のものなんだからあ～！」

後ろの方で何か叫んでる人がいるけど、きっと隼人が好きなんだろうな。

柴崎さんと隼人さん、友達だつたんだ……。
だからあんなに親しいんだね。

真琴が私の手をひいて、机に座らせる。

私はどうして真琴がそんなことするのか分からず、真琴を不思議そうに見る。

真琴は私の肩にそつと手をおき、小声で私に伝える。

「……槙野は女子から凄い人気があるの。だから『口口口』、気をつけて。女の嫉妬つてこわいから」

少し険しい顔。

どうしてそんな表情をするの？ 気をつけるって何を？

そんなの知らないよ。 隼人さんが人気だろうと私に関係ないも

の。

それに隼人は誰にでも優しいからいいんじゃないかなって思う。

ほんやり考えていたら少し変な笑い方をした女の子が教室に入ってくる。

柴崎さんだ。柴崎さんの隣には隼人がいて楽しそうに笑っている。
柴崎さんはチラリと私を見てニヤリと笑い、隼人の腕に手を絡ませる。

付き合っているみたい……。

女子のほとんどが悲鳴をあげている。

隼人は「どうしたの?」というように柴崎さんを見つめる。
真琴はギュッと強く拳を握り締めていた。

私は今日も美術部にいく。
今日は真琴もいた。

フワフワの先輩は私が来るのを確認すると必ずだきつく。

そのたび美人さんがとめにくるんだけど……。

そんなやりとりをしていると千恵が「男バスがいるよ?見ないの?」と笑う。

私は千恵を軽く叩くと美術室の窓を見る。そこからは男バスがシュー^{まえ}トをしようとして練習していた。

私はなぜかあいつが見たくなり、他の男バスの男など全然見ず、あいつーー大西を見る。

シュー^{まえ}トをはずすと悔しそうに強くボールをとり、シュー^{まえ}トをすると以前のような笑顔を見せた。

私はまた胸がきゅっとしめられたようになり、高鳴る。私はこれが限界で大西から視線をはずす。

すると千恵が「あれ、隣席の男の子じゃない?」と私に知らせる。千恵が言つとこりを見ると隼人さんがいた。友達と楽しそうに話しており、出番がくるとボールを投げる。見事ショートする。

「きやあー口口口、あの男の子カッコいいよ!」

千恵がわあわあと騒ぐ。

隼人さんも男バス体験してたんだ……。

確かにスポーツしてるとこりはカッコいい。

足もしゅっと細いけど筋肉はついており、前から運動してたんだろうな……。

きっと足もはやいだろ?

私が窓を見るのをやめようとすると隼人さんが少しだけこちらを見て、手をふってきた。

あまりの驚きに私は混乱し、千恵はきやー、とはしゃいでいる。私の顔はみるみる熱くなり、きっと真っ赤になつていると予想がつく。

隣にいた千恵がクスクスと笑い「口口口は誰に惚れているのかな?」と面白がる。

私はまだ隼人さんがこちらを見ているので恥ずかしくなり、窓から離れる。

でも顔が熱いのは消えない。

いくらクラスメイトで隣席だからってそんなことしなくていいのに……。また女子がヤキモチやくよ?」

私はなんだか早く学校から出たくて小走りで門をくぐる。すると後ろには隼人さんが！！

「星野さんだ！ 美術室にいたけど美術部に入るの？」

「あ、まだ分からぬかな。今のところは美術部なだけで「隼人の隣にいる友達がジロジロと私を見る。な、なんだろう？ 私に何かついてるかな？」

「この星野つて奴、隼人の彼女？」

「は、はあ！？ 何言ってんだよ！？ 同級生で隣席なだけで！ 彼女なんかじゃない！ そんなこと言つたら星野さんに迷惑だろ！」

隼人は顔を真っ赤にして否定する。

別に迷惑じゃないけど…… そんなに全力で否定しなくてもいいと思つんだけど……。

でも彼女がいるなんて噂をたてられたら女子は嫉妬するし、むしろ隼人が大変な気がするなあ……。 彼女、出来るのかな？

「う、うめんね。 こいつに後でいろいろ話すから。 ジャ、また

明日」

その友達の背中をおし、私と反対方向に戻る隼人さん。
もしかして私に声をかけるためだけに反対方向なのにきたの？
どうして？ 時間の無駄なのに……。

隼人が別れ際にみせた笑顔は無邪氣で綺麗でかつこよくて……。

また、胸が騒がしく高鳴るんだ。

one sided love-3 彼の笑顔（後書き）

隼人くんは個人的に凄い好きです

沢山ココロと絡ませてあげたいのです……。

隣席のお話が好きで蜜柑色でも書いてしました……。

「君と繋がる」だけにしようと思っていたんですけど。
とりあえずほんわりした雰囲気を出したいなあ。

o n e s i d e d l o v e - 4 相談（前書き）

一ヶ月放置……。

不定期更新なので遅れる場合もあるのであたたかい田で見て下さいね。

一ヶ月放置はなんとかしないよつこします！

あの日から数ヶ月が過ぎてもう真夏。

春とは違ひ太陽の光が強くなり、暑くなる。

夏が苦手な私は早く秋が訪れたらいいのに、と思つ。

でもよく「夏は爽やかな恋の季節」と誰かが言つてた。どういう意味か全く分からないなあ。

私は手に握り締めているスケッチブックを鞄にしまい、美術室に向かう。

「あら～ ハロちゃん、来ててくれて嬉しい」

「来るのは当たり前じゃないですか。美術部に入部したんですねから」

私はもう何か月か前に美術部に入部した。

楽しそうだから、というのもあるけど一番の理由は先輩に頼まれたから。

「美術部がこのままじゃなくなっちゃうーお願い、入つてほしいの！」と頼まれ断れなくなつた。

でも千恵と美咲も入ってくれたからいいんだけどね！

「もうすぐ五時かあー。そろそろ帰る準備でもしようか～」

フワフワの髪の先輩は持つていたスケッチブックをなおし、鞄を机に置く。

私もすぐに鞄を机に置き、先輩にさよならと言つた。

今日も部活がある。

勿論楽しいのだが何か物足りない。

そんな気になる。

なんとなくだけど不意に教室に戻る。

そして隼人さんの机を指で軽く触れ、なぞる。

誰もいないから出来ただけで誰かいたら絶対に出来ないことだ。
そんなことをしたら隼人さんのファンの女子に殺されるのではな
いだろうか。

……こわい！ 考えただけでブルブルと震えちゃうよ……。

「……ほ、星野さん？」

慌てて振り返ると少し息を荒くした隼人さんがドアのところにた
つている。

え。み、見られた！？　は、恥ずかしいーーー！

「何してるので？そこ、僕の席なんだけど」

近くに寄ってきた隼人さんの声に私は震えてしまふ。

お、怒ってる……かな？

ど、どうしようつー！　あ、謝らなきや！

「い、止めーーー！」

「え？なんで謝るの？僕の席に触ってただけなら全然いいけど
？それに忘れ物を取りに来ただけだし」

隼人の言葉に驚き、私は隼人さんを凝視する。すると机の中からタオルを取り出し「これ、部活にいるんだよ」と笑う。

「……やっぱ隼人は何の部活してるんだろう？」

「何の部活してるか気になる？そんな顔してるよ。……僕はバスケ部！」

「バスケ部かあ……体験してたしなあ。

でも隼人は運動神経抜群だからサッカーでもよかつたのに。

「バスケ部に入ったのはね、ライバルがいるからなんだ。名を棗。大西 棗。棗は運動神経抜群なんだよ？だからバスケ部のエースだよ。棗とはいライバルになれそうなんだ。あいつも僕のことエースと思っててライバル意識されてるしね。それに……棗は恋敵だし」

ふえ？ 最後に言つた言葉、よく聞こえなかつた。

小さく呟くように言つたから。

「なんて言つたの？」と聞くと隼人は柔らかい笑みをして「星野さんは知らなくていいよ」と言うから余計に気になつて。

「星野さんは部活は？」と優しく問うから私もつられて笑顔になつて「美術部だよ」と言つた。

「楳野さんは大西と仲が良いんだね」

「…………まあ。あのさ、星野さん。僕のこと『楳野さん』じゃなくて隼人って呼んでもらえない？その方がなれてていいんだ」

私は少し戸惑つたものの、他の人も呼び捨てだしいいかと思い、隼人さんを隼人と呼び捨てにすることにした。

隼人、と呼ぶと本当に嬉しそうに彼が笑うから。

私も幸せな気持ちになつてまた彼の名前を呼んでその笑顔が見たくなる。

「あー。もう戻らないと先輩に怒られるな。またね、星野さん」

君が手を振るから私も振替えして。

君が教室から出て行くと私は顔が熱いことに気が付いた。

見られてないかな？

見られてたらどうしよう？　は、恥ずかしいよ……。

私は鞄を見て部活のことを思い出した。

あ、行かなくちゃ！　先輩がきっと顔を紅く膨らませて「遅いよ」と怒りそう。

先輩はそんなことをしても可愛いから羨ましいな。

廊下を歩くと曲がったところに先輩と見知らぬ男の人人が楽しそうに話していた。

先輩は俯きながらも必死に喋っているので可愛い。

先輩はその男の人と別れると私にこりと微笑みかける。

「見られちゃったかあ～。『口ちゃんなら言つてもいいかも～。わ、わた、私ね、あの人の方が好きなの～！』

きゅうと恥ずかしそうにはにかみながら先輩は小さな唇を動かす。でもね、と悲しそうにも笑う。

「あの人は私を見てない。本当は私なんかより、あの娘の方がいいの」

先輩が見るのは美人さんだ。

先輩は『片思い』をしているのかな。だからそんなに切なそうに笑うの？

先輩の横顔は千恵や美咲の横顔とよく似ている。

千恵達も、好きな人のことを話すと嬉しそうにするけど、でも本当は深く悲しい笑顔。千恵も美咲も言っている。「アイツは私じやなくて他の人を見ている」と。

先輩もそう言つてる。

「相談が、あるんです」

「ん～？ 私で良ければなんでも聞くよ～？」

私はその場では言いにくいので裏庭に出た。

先生が花が好きらしいので育てている鮮やかな花が沢山。中でも好きなのは向日葵。

夏限定で先生が育てているんだ。花言葉は『あなたを見ている』。

私はその向日葵に近寄り、すぐ側でしゃがみこんだ。

「先輩、恋つてなんですか？」

先輩は驚いたように目を見開き、口を開けたままにする。

私は苦笑すると「恋がよく分からいんです」と付け加える。

先輩も向田葵に近寄り、向田葵を優しく見つめる。

「そりね、向田葵のよひ。いつも彼を見つめている、切ないくらごじうじゆもなく想ひ。……喋れると嬉しくて、ドキドキして。でも他の女の子と喋つてると嫉妬しちやう。案外複雑ね、恋する女子は」

先輩はこじこじしながら向田葵を撫でるよつに向田葵の上に右手を翳す。

私は先輩が幸せなつに話すから、もっと幸せになつてほしい。そして私はきっと酷いことを言つた。

「恋なんてしなければいいんじゃないですか？」

「そつ思うわよね？でも無理なのよ。恋は気付いたらしているもの。恋したら自分を成長させてくれる。強くさせてくれる」

先輩は少し表情を曇らせた。きっと私が無神経だから。

先輩に失礼なことを言つたから。

恋をしたら強くなれる？ 分からないけど、傷つくのは恐い。

「ハハハもいつかするよ。したら応援頑張るよ。恋は素敵だつて言つよ」

私には、そんな経験できますか？

先輩のように優しく相手を考えられる、優しい人になりますか？

私は相手のことを本気で想えるのですか？

先輩はその人を好きになつて悔いはないのですか？

そう聞こうと思つたけれど、私は自分で確かめたかった。

私にもそんな人は出来るのか。

それに本当に先輩があの男の人を諦めたら聞きたい。

「先輩は後悔しませんでしたか？」

そして先輩はなんて言つのか。

なんて、言うのかな……。

先輩は「ココロちゃん、部活に遅れても大丈夫だから」と私の肩を優しく叩くと裏庭には私だけになつた。

「星野？」

私はくるりと後ろを向く。

するとそこには……アイツが。

「なんだよ、んなところで」

私はアイツ、大西を見る。

大西は体操服を着ていて、片手にはタオルと水筒があつた。汗を凄いかいていて髪の毛が首に張り付いている。
確か……大西もバスケ部だよね。

部活じゃないの？

「部活はどうしたの？まさかサボリ？」

「そんなことしねえよ。今は、その……休憩だ！」

そりなんだ？

私は少し頬が熱くなるのを感じながら大西に笑いかける。
そういうえば大西と喋るのは何年ぶりかな。

あの日以来まったく話すのもなくなつた。

あれは私が悪いんだって分かっているけれど。

「でもさ、星野と喋るの俺がフラれてから全然喋ってねえよな？俺が星野に告つて星野にフラれて……あの時はズタズタだつた」

やつぱり大西も覚えてる。

私は何も言えなかつた。これ以上言つたらまた大西を傷付けてしまいそうで、恐い。

「棗！お前部活サボつて何やつてんだよー？なかなか来ねえから心配したんだぞ？」

隼人が来て棗を軽く叩く。

え？ やつぱりサボり！？

棗は隼人に引っ張られどこかに行つてしまつた。

私はまだ美術室に行けなかつた。

だつて、きつと顔が紅い。そしたら千恵にからかわれてしまつ。

「口口口～？」「んなところにいたんだねえ～？」

あ。誰の声かはつきり分かつた。

私は声の主——美咲に抱き付く。抱き枕のように。安心感を求めるように。

美咲は「どうしたの～？」と笑いながら聞く。そしてよしよし、

と私を抱えるように抱き締めかえしてくれる。

私は美咲に思い切って聞いてみた。

「七年も想えるのは本気の恋なの？」

美咲は「うん」と首を左右に振ると急に真面目で真剣な表情になる。

「そんなことないよ。何年も想い続けたからって本気の想いとは限らないよ？一瞬でさめちゃう恋もあれば一瞬で本気になる恋だってある～」

驚いた。

だつていつもは幼い美咲がしつかりと自分の意志をもっていたから。

美咲はしつかりしてなくて千恵がいないとダメと思つていたけど全然違う。美咲はちゃんとしつかりしてるんだ。

しつかりしてないのは私の方なんだ。

私もちゃんとおどおどしないで自分の意志をもたなくちゃいけない。

美咲のように、優しく見守るような、そんな強さを。

「大丈夫だよ。恋は叶わなくても相手の為に出来ることが絶対にあるから」

美咲は「お見通しなんだから」とくすくす笑うけど、お見通しつて何が！？
ま、まさか……美咲も思つてるのかな？
私が大西のことが好きだって……。

「わ、私は恋なんかしてない……」

「あれえ～？ 私、恋なんて言つてないけど～？」

は、はめられた！

美咲も千恵に似てきて……私が困つてゐのを楽しんでるーー！

……うー、ひどいよ、美咲も千恵も。

「じゃあ、部活始まつてゐるから早く戻るよ～？先輩心配してたんだからね～？」

美咲が私の手をひいて早足で階段を上つて行く。
途中こけそうになつたけど美咲の優しさが嬉しくて。
私は美咲のよつにしつかりするよつとするからね。
友達を、支えられるよつ。

one sided love-4 相談（後書き）

蜜柑色の更新ペースは月1更新です。

早かつたら月に何回かは更新出来ると想います。 5話は書き終わっていますがすぐに更新しません。

探検隊の方もあるのでバランスを崩さないよう心していきまや。 蜜柑色、次は六月更新かなあ……。

one sided love-5 気になるのは（前書き）

蜜柑色の更新日は28日か29日にしおりであります。

一ヶ月に一回更新で決まりですね……。

でも更新日は守りたいと思います！

読んでくれている皆さんも更新日の28日か29日に読みにきて
くれると嬉しいです。

「 ハロー。次、体育だよー」

真琴が体操服を持ちながら私に言う。

私は昨日のことでもんやりしていた。

美咲や、先輩。皆強いつてこと。

私はそうだね、と相槌をうち鞄の中に入れっ放しの体操服を取り出しお、長く茶色が少しだけまざつている髪の毛をポニー テールに結う。

長い髪はいろんな髪型にアレンジ出来るから好き。でもくくつてないと邪魔になることもあるからせめて体育の時だけ結つようとしている。

「あ、そういうえば今日の体育は四組とだね」

「……………はい？」

ぽかんとする私に真琴は知らないのか、と首を傾げる。
その時にさらっと揺れる髪はなんて可愛い仕草なんだろう。

「なんかね、時間割りが変わつて四組になつたよ。四組となるのつて初めてだよね」

真琴はうーん、と伸びをする。

私は四組に誰がいるのだろ？と思つ。

千恵、美咲、大西……。

お、大西！？ なんで出てきたの！？

片手に持つているタオルを落としそうになりタオルを持っている

手に少し力をいれる。

「あ、暑いからお茶とタオル持つて行かなくちゃ。待つててくれる？」

「うん。美咲達のところに行つてるね」

そう言つと四組に向かう。

窓から覗くと千恵が机の中を必死に探つている。ビラしたのかな？

我慢出来ずドアノブをきつく握りガラガラと開ける。

千恵はびっくりしたように固まり、淡く笑む。

「来て、くれたんだ？美咲は先に行つた。私も水筒を取つたらすぐに行く」

だから机をいじつてたんだ。

ふと机の上を見ると制服が綺麗に畳まれている。ブレザーは椅子にかけてある。

千恵は私のタオルを見て、それは？、とタオルをじつと見ている。

「このタオルは汗ふきだよ。夏は汗かくからね」

「へー、可愛いタオル！桜桃の柄だ。口口口らしい、可愛い柄」

千恵はふんふんと鼻歌を歌いながら水筒を片手に行つよ、と笑いかける。

あ、真琴を待たなくちゃ！
でもまだいるかな？

「ハハロ、待つてくれたんだ！千恵、だつけ？宜しくね？」

ひよこ、と小動物みたいな真琴が顔を覗かせてはにかむように笑う。

千恵もにこりと笑うと宣しく、と言いつワインクをおくる。

活発な千恵は見た目とギャップがある。

男っぽいな、って思つたら意外に女の子らしい。

そこがお姉さん的存在なんだけど。

「ハハロー！ほーっとしてない！遅刻するよー！」

「あわわ……。行くから！待つてーー！」

千恵が軽く頭をポン、とたたく。

私は急いで千恵と真琴の後ろについていく。

2人は気が合つのか話が弾んでいる。

私には分からぬ、いろんな話。

あれこれしているとグラウンドに着き、皆並んでいた。

これは……遅刻だ。

急いで並ぶとそのままマラソン。

少し息を切らすと先生が満足したように笑顔。

「よしー走ったことだし、今日の体育はサービスして1500メートルを走るぞー！タイムはちゃんと覚えろよー！」

先生……。それサービスじゃありません。

タオル持つてきて良かった……。

でも走るのは嫌だな。 そういうえば大西の走り……見たことないな。 見て、みたい。

「隼人ー。棗いるぜ？ライバル対決だなー。どっちが速いんだろ
うな」

「プレッシャーかけないでほしいんだけどな。ま、対決つてそ
んな大袈裟なものじゃないけど」

男子の列から冷やかしにも似た声。

隼人は呆れたように笑う。

大西も隼人の近くにやつてきて肩に手をおく。

隼人もにやり、と楽しそうに笑う。
そんなに楽しみなのかな。ライバルと意識しているからその人
と勝負するのは嬉しいのだろうか。

私には分からない、ライバルの存在。
すぐに走る準備をするともういつせいにスタート。
後ろには千恵がいてくれて励ましてくれる。
で、でもしんどい……。

ゴールして、タオルで汗を拭うと隼人と大西は地面に座つて、胡
座をかいている。

そしてお茶を飲みながら笑い合つていた。

「あー。まさかまた同じタイムでゴールするとはな。やつぱり
ライバルだ！隼人は、俺のライバル」

「嬉しいこと言つてくれるね？僕のライバルも棗しかいないよ

そんな会話が聞こえる。

2人は信頼してる。

友達だけど、ライバル。 そんな関係なんだろうな。

「おしーもー一回勝負しようぜー！」

「うーん、いいけど先生が許してくれないとダメじゃん」

隼人は冷静。 逆に大西は落ち着きがない。

モテるのはきっと隼人の方だろう。

私なら隼人の方がいい。 大西はなんか……無理かな。

2人は先生のところへは行かずにそこらへんのグラウンドにスタートラインをつくる。

そして次の瞬間……走った。

綺麗なフォームで走り、同じぐらいで横に並んでいる。

隼人さん、速い！

でも……目が追っているのは大西^{アイツ}でーー。

「こらー勝手に遊んでんじゃねえ！」

先生が気付き2人は途中で走りをやめる。
もう少し、見たかった。

君の、その走りを。

「へえーカッコいいじゃんーあの、四組の」

柴崎さんがくす、と笑う。

大西のことを言つてているのかな？

そんな不安に一瞬戸惑つ。 どうして私、こんなに不安になるの
……。

別に大西に惚れた人がいても関係ない。

アイツが、誰かと付き合つたつて……私には……。

「あー、あれは大西　棗　だよ。柴崎さんに似合わない。平凡すぎるよ、棗は。柴崎さんは槇野　隼人　と似合つよ」

四組の女子がため息1つ。

柴崎さんはふうん、と咳くとこつちに来て私の目の前でしゃがむ。す、凄い綺麗で整つた顔が私のすぐそこに……！
男子なら一瞬で心を奪われるんだろう。

「ねえ、星野さん。大西　棗　と隼人、どっちが好み？」

どうしてそんなこと聞くの？　分からぬいよ。

私にはそんな話する必要ないでしょ。

柴崎さんがどうしたいのか分からぬ。

言つた方が、いいのかな……。

「うう　んと……おお、……隼人」

大西と言いそくなつて口を塞ぐ。

勘違いされると嫌だから。

アイツに氣があるなんて思われたら、最悪。
だから隼人にした。

ごめんね。

「そうかあ。隼人紳士的だもんね！私つてカッコいい人より、
どこにでもいそうな平凡な人がいいのよね！だから私は大西　棗
が好みかもね」

柴崎さんの言いたいことはそれだけ？

なら、他の人に言えばいいんじゃないの？

私だって聞いて嫌なことつてあるんだから……。 柴崎さんは声を出すとまっすぐ迷いのない足取りで大西の前に行く。そして笑って話しかけている。

「棗だよねー！ 初めまして！ 六組の柴崎。 もうきの走りかっこよかつたじやん！」

「俺のこと知ってるんだ？ 初めましてなんていられよ。 柴崎、か。 ありがとな」

照れくさそうに大西が笑う。

柴崎さんは、積極的だ。 気に入ったら手に入れようとアピールすると聞いたことがある。 それはきっと大西を気に入ったということになる。

チャイムが鳴つたので重い足を引きずるようにして教室に戻つた。あとから真琴達に心配された。

大丈夫だよ、と笑つて誤魔化すけれど……。 今感じてるもやもやはきつと気のせい。

気付いちやだめ。

この感情が何なのか、気付かないふりをして心の変化に目を瞑る。それが今の私に出来る、卑怯なやり方。

帰る時間になり、四組で2人が来るのを待つ。 真琴も一緒に帰りたかつたけど別に帰る人がいるみたい。

なら邪魔したらだめだよね。

だから真琴と一緒に帰ろう、と言わなかつた。 言つたら邪魔してゐるから。

私は待つてゐる間暇だつたので窓からグラウンドを見る。 サッカー部か陸上部か知らないけど何人か走つてゐる。 私も部活したいけど、今日は活動日ではない。 だから大人しく帰るしかない。

「星野さん？ あれ、四組に待つてゐる人がいるの？」

声のした方を反射的に振り向くと隼人がいた。 体操服を着ていて、今から部活があるのだろう。 水筒を持つてゐる。

「うん。 今日は部活がないから友達と帰るの。 隼人は今から部活？」

「そうだよ。 夏に運動部は走り回るから辛いんだ。 吹奏楽部とか美術部はクーラーのきいてる部屋にいれていいいなあ」

私は思わず笑つてしまつた。 こんな暑いなか毎日のように大西と走り回つてゐるのかな。 そう思うと笑つてしまつ。

隼人も柔らかな笑顔を浮かべてゐる。

「じゃあね。 遅れると先輩に怒られる。 あ、今日雨降るかもよ。 気をつけてね」

隼人は階段を2段飛ばしでおりていく。

ちょうど四組のドアが開き、ぞろぞろと出でくる。 千恵が怒つたように大西と言ひ合つていた。 こうこうといふのは

小学校の時から変わらない。

「棗——」

ふとアイツを呼ぶ声がして大西の元へ駆け寄つた女の子——柴崎さんを見る。

体操服を着たまま。
この人も運動部だ。

「ね、一緒に行こうよ！私、女バスだしさあ！近いからいいでしょ？」

「んー。断る理由、ないしな」

柴崎さんはやつたあ、と喜んで顔を綻ばせる。2人は仲良く私の前を通り過ぎて行く。

そんなこと、気にしない……。

大西は、誰のものでもない。今は。

「もーー！大西め！綺麗な子と幸せそうにして……□□□？大丈夫？」

「…………何が？わ、私は元気だよ。心配しないで」

作り笑いを浮かべ、窓をふと覗く。
するとさつきの晴れやかな天気とは比べられないぐらい雨が降つていた。

「傘、持つてない」

そんな千恵の話をすら聞いていたのに私の心は胸に濡れられた
よつこしんみりとしていた。

one sided love-5 気になるのは（後書き）

「口の心情はぐらぐら揺れます。

幼い子供じゃないんですが「恋」が分からず迷ってしまいます。

柴崎さんは……もう分かりますね（笑）

隼人も分かるんじゃないでしょうか？

秋のお話、細かく設定中です。

one sided love-6 2人の距離（前書き）

サブタイトルは関係ないかもしません。

さて、次回から秋話ですよ！

早くすいません！秋話も3話ぐらいで終わります。

だいたい3話を目安に季節を変えていきます。だから春も夏も3話で終わっていますね。

もつと長くかけたらいいんですがサクサク進んだ方が読者様には読みやすいのかもしれません。

one sided love-6 2人の距離

私は鞄を頭の上に乗せて落とれなこよつと手を添える。

その状態で雨の中、走り中。 千恵達を待つていて気がついたら降っていたもんだから。 傘、皆持っていないのでこうするしかない。

寒いし、濡れるし……。 風邪ひきやがい……。

千恵がちらりと私を見てため息。 千恵がちらりと私を見てため息。 どうしたんだろう?

「ハハロ、本当はもやもやしてゐるでしょ?」

「してない…そんなことない…」

もやもやしてゐる感じ。 胸の奥がさつきからイライラする。

なんて、いうんだね!……。

何か、分からぬいけど見たくないものを見たような、そんな感じ。 何を見た? 悪いものなんて見てない。

「まあいいけど。でも、忘れないで。私はハハロの味方だから

「ね

千恵はいつものように優しく話す。

私は……強くなるつて決めたのに。

イライラしてるからつて友達に八つ当たりなんていけない」と。

「ごめんね。千恵。

私は支えられてばかり。 なら、私から恩返しあげや。

「じゃね。辛くなつたら電話でもしておいで。家に来ても私は

全然大丈夫だからねー

「ありがと…『めん、千恵……』」

泣きそうになるのを必死に押さえて言葉を紡ぐ。泣いたらまた迷惑かけてしまう。

だから2人の前では絶対に泣きたくない。

意地なかもしれないね。

2人と別れ、家にフラフラと帰る。

そしたら、誰かが家の近くのところに誰かが蹲っていた。声をかけようとして肩に触れるごびくり、と震えた。何かに怯えてるよ!!。顔を覗くと……あれ? もしかしてこの子は真琴?

「真琴なの? どうしたの?」

その子は顔をパッと上げる。あ。やっぱり真琴。でもいつも顔じゃない。

目は赤くなってるし、涙のあとのようなものが一つ。

私が肩に手を添えると瞳の奥が揺れた。

泣くのを我慢してる? 目は潤んで今にも涙が零れそう。

「真琴、具合悪いの? 道路でこんなことしてたら迷惑になっちゃうから……とりあえず私の家に来る?」

真琴は反応しない。

ほつとけないし、家にいれるしかないよね。一人で泣いてたのかもしれない。

なら、私は傍にいてあげたい。真琴の不安や悲しみを支えてあげたら。力になれたら。真琴を擦りながらエレベーターのボタンを押し、待ってる間ハンカチを差し出す。真琴は震てる手で

握る。エレベーターには人がいないから良かつた……。

家の鍵を開け、真琴を部屋の椅子に座らせて落ち着くよつとお

茶を出す。あ、雨だったから私達、びしょ濡れだった……。

タオル、持つていかなくちゃね。

窓を見るとますます雨が激しい。

真琴のところに戻るとお茶をおいてタオルを渡す。

「悪いよ、こんなの……お茶だつて……」

「いいよ？ 真琴は友達なんだから。気にしないで。ほっとけないもん」

両親は仕事だから。やつひつと真琴はゆっくつお茶を飲んで「おこしこ」と落ち着いたように涙を拭き取る。

「何が……あつたの？」

はつきり聞いたらダメだけど。
でもそうじないと聞けない気がしたの。
隠すつていうのかな。よく分からぬけど。
真琴は黙る。言いくらいのか、言いたくないのか。
言いたくないなら聞いた私が悪い。

「過去のこと思い出した。『あん、私長面するのはよくないからもつ帰るね』

真琴は逃げるよつと玄関に行き靴をはく。あ、真琴つて傘ないよね？ 今、どじやぶりだけど……。

貸したほうがいいはず。雨の中帰つたら風邪をひくからね。傘を見ると私のお気に入りの花柄がモチーフの可愛い傘がある。

クローバー、椿、秋桜、梅などの四季の花がちりばめられていて
華やか。

真琴を引き止め傘を渡そうとすると真琴は暫く傘を見つめ苦笑。

「可愛い傘だけど私には可愛すぎるかな……。透明なのない?
シンプルなの」

「ん。そつか。待ってね……」

傘を見ていくとシンプルが少ない。いや、ない。
……しうがない。透明はないけど全体が青ならある。
これでいいのかな? 真琴に似合ひの色は分からない。
小動物みたいだから……自然色。
その色が似合う。

私の勝手な想像でよく間違えるけど。

「青? わあー。シンプルでいいね!」

嬉しそうに真琴はきやつときやつと笑う。
真琴はパン、と音をさせて傘を開くと雨の道を帰つてくる。
その時の後ろ姿は寂しそうに見えた。

錯覚……かな。

とりあえず私は宿題でもしよう。数学とか苦手なので分かるようになければ。

得意とすれば社会だらうか。いや。それは小学校の話。
社会は難しくなるだけ。得意科目……ないかも知れない。
それはそれでだめだらうなあ。

宿題したらお風呂に入ろう。今入つてもいいけど宿題で手が汚
れてしまつ。

テキストを出してもみると……「うふふ?」

あれ、なんだこれ？ こんなのが知らない……。

計算式？ うーんと…………やめよう。 明日美咲に聞

こう。 美咲、あんなにゆっくりでも賢いからなあ……。

羨ましいなー！

お風呂入ろうと。

私はシャワーを浴びて冷えきった身体を温めそのまま布団に倒れこむように寝転ぶ。

眠い……。 少しなら寝てもいいよね……？ 少し、だけ……。

「んー……。 何か眩しい……」

起き上がって窓を見る。 太陽が出ていた。 私、あれからずつと寝てたんだ……。

太陽の光は眩しい。 思わず目を細める。

「ゴロゴロー！ いつまで寝てるのよ？」

お母さんが朝食を作りながら叫ぶ。

制服に着替え、味噌汁を飲み、ご飯に鰯のふりかけをかけていた

だぐ。

うん。 美味しい。

…………ん？ 待って。 私、日直だった……？

「ご馳走さまー行つてきます！」

小走りで学校に向かう。 隼人、来てるかな？ 仕事してたらど

うしょつ……。

隼人だけにさせるのは酷い。 日誌を書くのは私でいいかな?
男の子って書くの嫌がるしねえ。

「あー。 星野さん、 来た」

隼人がいつもの笑みをして花瓶の水をかえていた。 男の子って
こんなこと嫌がると思ってたけど……違うのかな? それに嫌みな
く似合つてゐる。 隼人は何をしても似合つから。
カツカツいからかなあ。

「ごめんね。 忘れてた!」

「いいよ。 僕も忘れてたしね」

え! ならなんで……? いるんだろう?
たまたま早く来て思い出したとか?

「朝練だよ。 朝練があつたから早く来れたんだ。 で、 思い出し
たわけださ」

なんだあ……。 朝練かあ。 私とかにはないから分からぬ
どきつと大変なんだろうな。 朝は何時起きなんだろ……。
考えただけでゾッとするよ。

私は教室に鞄を置いて黒板を綺麗にする。 あとは…… 叩きとか
日誌ぐらいかな。

隼人の仕事も手伝いに行こうっと。
さすがに恥ずかしいと思うから。
教室を出ると笑い声が響く。 この声は誰かすぐに分かった。
——柴崎さん。

柴崎さんの笑い声は癖があるから分かる。でも柴崎さんはどうしてこんなに早いの？特に用事もないはず……。笑い声のした方を見ると4組の前。そこには小さなシルエットが一つ。誰のか分かった。朝練。4組。小さい。大西しかいない。

「棗……それはダメでしょ。バカじゃん」

「るひせえなー。仕方ねえじゃん！ならどうすれば良かつたんだよ？」

何の話……？聞きたい。2人が何を話しているのか。気になつて仕方がないの。こんな気持ち、嫌だから。聞いたところはどうにもならないかもしないけど、それでも……。

「うーん。あんまり話したことないんでしょ？なら女友達としてすればよかつたのよ……私じゃダメ？……みたいな冗談を言える関係にね」

「ふうーん。柴崎はそんなふつに言われるのがいいのか？」

柴崎さんは顔を少し紅くさせ、皿を泳がせる。少しだけ手をパタパタと動かし何かを伝えようとしているのは見て明か。

「わ、私は…自分から言つ派…告白は自分が言いたいの！」

「そーか。俺はなかなか言えねえよ。フラれたら最悪だし？」

告白……。私もしたことがなかつた。

ううん、好きな人がいないからする機会もなかつたんだ。好きな人出来たら嬉しい……？

告白したい……？

そんな想い羨ましい。

「星野さん、そんなところでなんで蹲つてているの？」

横を見たら心配そうに私を見る隼人が映る。私は立ち上がり出
来るだけ笑顔を作つて「何でもないよ」と話す。隼人はそれでも
心配のまなざしをやめなくて。言つたことを信じてないな。
そこが隼人の優しさもある。他人を心から心配して。この
人は誰からも好かれる。そう思う。花瓶をそつと窓側に置いて
窓を開ける。空気の入れ替え。

皆が来る前にはやはり綺麗にしておきたいものだ。

「そういうえば美術部つて文化祭何を体育館に飾るの？」

油絵のことかあ。もうすぐ秋だから文化祭には体育館に絵を飾
ることになつているんだよね。私はまだ油絵を完成させてないけ
ど先輩達の絵は上手い。さすが部長さん。
でも何を飾るか教えたらつまらない。
文化祭まで秘密。

「秘密。文化祭で見てほしいから」

隼人はそうだね、と苦く笑う。苦く笑う理由は分からぬけど
私が気にしてたらだめだろう。筆箱を取り出してノートに絵を書
く。スケッチブックがないときはノートに書くようにしている。
それはそれでいけないなあ……。

ノート、すぐに減るし。すると隼人が後ろから覗き込んだ。
びっくりして持つていたシャーペンを落としそうになる。
隼人の整つた顔が近くにあると心臓に悪い。知つててやつてる

なら性質^{たち}が悪い。

「星野さん、頼みがあるんだけど、いいかな？」

「出来ることないうじよ?」

「こいつと笑いノートをどる。
そして自分を人差し指で顔のあたりを指すと「僕を描いてよ」と
言ひ。え……? どうして?」

「星野さんの絵つて柔らかいけ。優しいつて言ひのかな」

ノートをペラペラとめくり私が今まで描いた絵をゆっくり見てい
く。褒められた……。優しいなんて言われたの初めて。
未熟だ、とか荒削りつてよく顧問の先生にも言われた。
だからずつとスケッチしてたの。時間があつたらいつでも。
そんな絵を、好きだと黙ってくれる人がいる。もつたいなくて
泣き出しそうになるよ。

「描いてくれますか?」

わざとらしい言葉に思わず笑う。

私の返事を分かつているんだろうね。君は。だからそう言つん
でしょう? 私も嫌ではないよ。むしろ嬉しい。君を描けるな
んで。勉強にもなるから、ありがとつ。

「油絵が、終わつてからでいい? 今は油絵に集中したいから」

「いつもいこよ。油絵、楽しみにしてる」

そうだね。君に喜んでもらえるように良い作品になるよつ、頑張るよ。だから待っててね？君の柔らかな笑顔を描けるまで。

one sided love-6 2人の距離（後書き）

棗との絡みがなくてすいません！

なんだか棗より隼人の方がココロと恋愛関係になりそうですね。
今のお話を展開で例えると起承転結の「起」なんですよ、まだ。
「承」の部分はまだ先……。

ココロと棗の絡みはいつなのか？

それは……まだ先です

one sided lover 7 描くと決めたから（前書き）

蜜柑色更新ですね。 蜜柑色は書いてるといふと口と棗が絡まないような……。

次回かそのまた次回に絡ませる予定です。 7で秋になりましたが冬あたりで蜜柑の意味が少し分かつていただけるかと……。

one sided lover 描くと決めたから

私は隼人と約束してから熱心に油絵に取り組むようになったと思う。自画自賛かもしれないけど前よりはやる気が出たの。綺麗な絵にしたい。隼人が褒めてくれた優しさがある絵に仕上げたい。

「あら～。上衣の部分、綺麗に出来てるよ～。ん……でも少し悲しい絵ね。青が沢山あるからかしら～」

ふわふわの先輩は片手に細筆、もう片手には絵の具を持っているという構図。

先輩、少しだけ表情を曇らせるけどそんな感じも可愛い。やはり、可愛い人は何でも似合ってしまう。先輩の隣に美人さんがいても負けないくらい可愛いけどな。

ちらり、と先輩のエプロンを見る。音符や星が散らばっている可愛いエプロン。

それにくらべて私は黄緑と白のチェック柄。油絵の時は制服が汚れないように、と先生がエプロンを持つてくるようにと言ったので持つてきたのだが……。なんでそんなに可愛いんでしょ？

「ハロちゃん、聞ってるの～？」

先輩がふくつと頬を紅く膨らませ赤風船のようになつている。こんな可愛い仕草、真似出来ない。うん。可愛い人しか似合わないね。すると美人さんがふわふわの先輩の肩を数回叩き呆れたように先輩を見る。

「あのさあ……アイツが呼んでるわよ

ちょい、と人差し指を廊下にてる。

ドアから覗いてる男の人がいた。ああ、前にみた先輩と話してた人。先輩は紅い顔をさらに紅くして油絵の具と細筆を机に静かに置き、恥ずかしそうに、でも嬉しそうにその人の傍に行く。

「お? エプロン似合つてんじゃんか」

「か、からかわないでよ! な、何か用事でもあるんでしょう? さつさと言つて」

先輩は冷たく言い放つ。照れ隠し?

男の人はちえ、と残念そうに背を向け、鞄を背負う。先輩はぎょっとし、慌てて男の人の腕を引っ張り足をとめさせる。

男の人は「何?」とでも言つまうに先輩をじとり、と見る。

「用事は何なのよ? なんで帰るのよ」

「あー。俺ね、お前に逢いに来ただけ。別に用事なんてない。逢いに来るのは、迷惑?」

先輩は男の人の腕を放し、戸惑つているのかな。瞳の奥が揺れている。なんて言おうか迷つてているんですね? 先輩。素直になることは大切ですよ? 意地を張つてたらきっといつか後悔します。

「そんな冗談やめてよ……。私じゃなくてあの娘に逢いに來てるんでしょ! ? あの娘に聞けばいいじゃない! 」

先輩は叫ぶように。すると泣いたのかその場にしゃがみこんで震えた。 美人さんがやれやれ、と先輩に近付く。先輩が言つてる「あの娘」は美人さんのこと。

男の人はため息をついて美人さんをじりり、と睨む。 美人さんも男の人を負けずと怖いくらい睨む。

「てめえ、泣かせんじゃないわよー約束が違うじゃないー！」

「お前こそそいつに何か言つたんじゃねーのー？俺がお前に逢いに来るとか絶対無いしー！」

なんか激しい言い合いに……。 と、とりあえず先輩にも話を聞いてもらわないとダメだよね？ もしかしたら先輩が言つてることは誤解かもしねり！

先輩に近寄り肩を何回かぽんぽんと叩く。 先輩は顔を上げて潤んだ紅い目で私を見る。

「だあーー！誤解すんなよ！俺は好きな女を泣かせたくねえよー！」

その瞬間、美人さんの顔がふつと和らぎ先輩の方へ向けられる。先輩は顔を上げたくない、と訴えるように首をぶんぶん振る。

「はつきり言えばいいんだろー？俺はお前が……好きだ！泣かして悪い！」

先輩はがばっと顔を上げて呆然と男の人を見る。 みると先輩の顔が紅くなるとつられたように男の人も紅くなる。 美人さんは先輩を抱き締めるように包み込み、また男の人を睨む。

「あんたが早く言えばよかったのよ！好きな女の子泣かせて…

…何やつてるの…？」

美人さんが男の人を殴りそうな勢い。

男の人は「う……」と申し訳なさそうに下を向いて頭をぽりぽりと搔く。 美人さんはなんていうか……わいぱりしてゐるな。 千恵と似てる。

先輩はまだ顔が紅くなり、口をぱくぱく動かす。 先輩はほっとかしですかー？

「あの、そのー……わ、私……のーす、好きなのー？」

「そのことについて今から話すわね。いろいろと誤解してるみたいだから」

——「コイツと私は単なる近所で。顔見知り程度。けどいつからかな。コイツに話しかけられたのよ。ふわふわの髪の女の子は誰だつて。紹介してほしいって言うから。それであんたに紹介したのよ。んで、数日後に「好きになつた」て報告してきたから応援するから約束を1つ。「あの娘を傷付けないこと」それが、条件。まあ、よつするに「泣かせるな」ってことね。

それが美人さんが語つたこと。男の人の相談役だつたみたい。先輩と話す機会が出来たのも美人さん繫がりらしい。

「あとはあんたに任せると。上手く伝えなさいよね」

さあ、戻ろう? 美人さんはにこやかに笑つて言つものだから私も2人をちらりと見て美術室に戻る。

大丈夫。あの2人なら。不器用で壊れそうな恋だけど。きっと伝え合えば。気持ちは、繋がるよ。

「ココロちゃん。ありがとう」

美人さんは嬉しそうに言うからなんだねって思う。けど理由は教えてくれない。

誤魔化すように油絵に取り組んで美人さんはあの2人の、幸せそうな絵を描いていた。

暫くすると先輩が戻りまだギクシャクとした歩き方。その途端、上手くいったんだなって分かった。

先輩はさつさつと油絵を片付けスケッチブックを取り出す。

「約束、したの。油絵が終わったら……描いてあげるって」

描くつて決めたから。そう言う先輩は幸せそうで。羨ましい。それにその約束は隼人と私の約束にそつくり。先輩は、あの人を好きになつて後悔はありませんか？

その問い合わせはもう分かつたような気がする。だつてあんなに幸せそうな人が後悔なんてしない。

きつと笑つて、ないよ、と言つだらう。

私は窓をじっと眺める。外では男バスがいた。その中から隼人を見つけることが出来た。ゼッケンと後ろ姿で。けどアイツがいない。元気で、少しやんちゃで、隼人のライバルのアイツがーー。

「棗ー！こつちだ！」

誰かが叫ぶ。すると真っ直ぐにボールが叫んだ人の元へ。この投げ方は見覚えがある。遠い日の、アイツの投げ方。くるりと違う方へ目を向けるとアイツが。それを見て少し頬が緩んだ。君を、描きたくなりました。

君の彩はどんな彩ですか？

あるとしたら。

元気な君には太陽色ですか？ 少し優しい君には自然色？
でも一番似合うのは……。 苦い色が混ざった、あの色。

「口口口ちゃん。油絵終わったのかなー？」

先輩が私の絵を覗く。 すると、うん、と笑いながら満足そうにする。 理由が分からずにいると「口口口ちゃんらしさが出てる」と言つ。 それは褒め言葉なんですか？

なんかすつぐダメだしされてるよつな……。

「嫌味じやないよ～？ あのね、口口口ちゃんみたいに優しい絵だなあ、つて思つてね」

それは隼人と同じ。 どうして優しいと思うの？ 私は全然優しくないのに……。

臆病で周りの人を振り回す、そんな性格なのに！ 勿体ないよ、
私にそんな優しい言葉。 先輩の方が優しいです。

「口口口ちゃん……。 つまらないこと考えていたら怒るからね

？」

「つまらない」と……。 そののかもしね。 今氣にしていい
たつてダメ。

油絵に集中しなくちゃ。 そして隼人に喜んでもらえるような絵
にするんだから。

今はそれ以外のことを考へない。

「あ。 いの絵は……。 ありがとう」

先輩は美人さんの絵を見て一瞬とまる。

美人さんは面白いのかそれとも別の理由なのか、微笑みながら返事を返す。

美人さんに何か言われたのか先輩は顔を固まらせ目に涙を浮かべる。先輩の顔、忙しいな。今日はころころ変わって。

先輩が他の人の絵を見に行くと美人さんは私に教えた。なんて言ったのかを。

「私をふつてあんたを選んだアイツと別れるとか言わないでよね。もしそうなつたら私、奪いにいくわよ？」

それは美人さんもあの男の人が好きだつたということ。告白したけど男の人は美人さんじゃなく、先輩を選んだということになる。でも、美人さんは先輩と男の人を心から応援してた。応援するだけで辛いと思うよ？ 私には……よく分からぬけれど。

「最初はね、くつつかなければいいって思つたわ。でもどうしてかな。応援したくなつたのよね。いつまでも友達のままの2人にイライラしてたかもしれないわね」

笑いながら話す美人さんは遠い日のことを思い出すように、振り返るように話す。美人さんはもう吹つ切れているんですね。態度からしてもう男の人は「前の好きな人」になつている。今は「友達」の関係なんだろう。

美人さんはため息をついて少し嬉しそうに笑つた。

「でもこれで終わつたわけじゃないわよ？あの2人だもの。喧嘩も沢山するわ、きつと。そうしたら絶対あの男は私に泣き付いてくるのよ。相談役は、まだまだ続くわね」

面倒よ、と美人さんは言うが言葉と違ひ顔は嬉しそう。それは

どうしてなのかな。

相談役はそんなに楽しいの?

美人さんはくすりと笑い「2人を応援してるって感じられるの」と言いキヤンバスに色を塗り始める。

「さあ、完成させるわよ。あの2人の絵を描くつて決めたんだから」

幸せそうな2人を描くとね、吹っ切れたんだって思えそうよ。
そう言って美人さんはまた柔らかく笑った。私も自分のキヤン
バスに戻つて色を塗る。秋の風に秋の蒼空。絵を描き始めてか
ら自然の微かな変化も気になり始めた。

絵に影響するの、と風景画を描いていた誰かが呟いた言葉。

風景画を描いたことがないから分からなければ風や蒼空に変化が
あると風景画を描いていた人は消しゴムを持って蒼空を消す。
それほど気になるみたい。絵を描くと先輩達が言った言葉を思
い出す。私は風景画じゃなくて果物や花、瓶だけ。
でも次の油絵を描くとしたら私はきっと人を描くだろ?。
美人さんのように幸せそうな絵を。
描くなら。

「アイツ、なのかなあ……」

不意に大西が浮かんで呟いた。描きたいけど。もう一人ほし
い。隼人とか? それとも……。

「そこ、サボらない!」

注意されたので色をぐりぐりと塗る。
文化祭まであと少し。何回言い聞かせるんだろうね?

今は油絵に集中するんだからーー。

one sided lover 7 描くと決めたから（後書き）

先輩みたいに好きな人の前じゃ素直になれない人はいますよね。
照れ隠しとか。

ついつい思つていることと逆のことを言つてしまつ。よくありますね。

だからこそ口々口のように素直で無邪気な女の子が書きたくなる
んです。こんな娘がいるんですよって。

冬は書きたい話が沢山あります。
隼人や棗の友情も書きたいですし。
ココロと棗も増やしたい……。一応冬は大きく動きだします。

先輩が好きな人と結ばれてから数日経つてすぐに文化祭に。私はなんとか油絵を終わらせて体育館に飾られてある自分の絵を見ると恥ずかしい。

隼人も見てくれるかな。ドキドキした中で文化祭は始まる。最初は吹奏楽部の演奏。知ってる曲から知らない曲まで。凄いなあ！私は吹ききつとあんなに覚えられないよ……。

吹奏楽部の部員は動きながらふくので大変だらうな。

でも、みんな喜んでいるから良かつた。

私が心配するのも変だけど。演奏が終わると拍手が大きい。それだけ凄かつたからなあ。

吹奏楽部がいなくなると私は隼人と感想を言い合つ。

「凄かつたねー。隼人はどれが一番良かつた？」

「一番最初の曲かな。やっぱり最初だから曲が賑やかで良かつたと思うよ」

隼人の感想を聞くと後ろにいる真琴にも感想を聞く。文化祭の時も出席番号順に座るので隼人と真琴は近い。だから話せるので嬉しいな。

「あ、1組の始まつたよ！」

舞台の方を見ると確かにライトがあたつていたので口を閉じる。台詞は聞こえないところもあるけれどだいたい場面が変わると同時に展開が分かっていく。

「私は……あなたを、……好きが分かりません……」

舞台上に立つてこむ女の子の台詞がはっきり聞こえて耳に残る。今私の気持ちのようで。女の子は泣きながら去つて行くといつ場面だつたけど女の子の役は涙を流していなく、顔を隠しながら裏舞台へ消えていく。中学生で役で泣くのは難しいもん。演技を上手く出来なくて当然だよね？ 演技で思つたけど大西は出来るのかな。そもそも役をやつているのかな。きっとしてないんだろうな。してたらそれはびっくりするけど……。舞台を見るとまた女の子が出てきていた。

「好きが分かりませんがあなたに逢うと嬉しくて。話すだけでも楽しくて。この気持ちは何か分からないんです。……あなたは、こんな想いを抱く私をどう思こます？」

「別にどうも思いません。ただはつきりしているのは僕は君を好きなのです。僕に振り向いてくれるまで諦めるつもりはありませんよ」

逢うと嬉しい、話すと楽しい……。

それは大西にこつも思つこと。逢うと嬉しくなるし、時々話しただけで楽しくなっちゃう。この想いは分かる気がして分からぬの。これが恋なのかな、って思つたり。でも否定してる、心の中で。これが恋なら楽しいだろつ。今まで以上に大西を意識するだろつな。恋と認めたら。でも認めたら自分らしくなくなるかもしれない。それがこわくて認められないよ……。

「私ね。あなたが他の女性といふと心がモヤモヤしてイライラするの。あなたが他の女性を見ていても。違う女性の話を私にされても。胸が苦しいの。どうすればいいんでしょ？」「……」

同じ想い。大西が柴崎さんといふとイライラして。他の女の子といふと苦しくなる。どうすればいいのかな……。こんな想い消えたらしいのに。そういうえばイライラしたり苦しくなったり……大西に振り回されることもないのに。

「僕が治しますよ。だから僕と一緒にいてくれませんか？」

「ふふつ。嬉しいです。そうですね。あなたといふのも良さうです」

恋が全て上手いくなんて思わない。辛いこと、嬉しいこと、悲しいこと……。

きっと嬉しいことも多くて。悲しいことも多いのかかもしれないね。でもきっと恋をしたら何かを得られるよね？　きっとなにか得られるよ。そう思つたら恋をするのもいいかも知れないな。でも今の私じゃ不安もあるから……少し時間がかかりそうかな。何が不安かよく分からぬけどね、何か変わるような気がして。

「星野さんー？」　　具合悪いの？

隣を見たら心配そうにする隼人がいた。

いろいろ考えていたせいか劇は進んでいて今は3組の終わりぐらい？

「だ、大丈夫！　考え方があつただけで……。心配しなくていいよ？」

「そつか……。星野さんって身体弱そうに見えるから。ほつとけないんだよ」

ま、まずい……。今、きっと顔が赤い。『ほつとけない』なんて言われたら……。隼人は分かつて言つてるの？

隼人の方は見れなくて心を落ち着かせる為に深呼吸をしてみる。少し落ち着いたような気もして、緊張も和らいだ。

「はい。半分のクラスの発表が終わつたので少し休憩にしたいと思います。後ろには美術部の絵が飾られているので見て下さいね」先生がマイクで言うと元々高い声がさらに高い。

隼人は席を離れて後ろに行き、美術部の作品を見ていく。約束したから見てくれるのかな。

で、でも……じっくり見られるのも改めて恥ずかしい……。

真琴を見ると後ろで作品を見てるし……。

そ、そういうえば先輩や美人さんの絵はどんなのだろう。

後ろに行くとみんなの絵があった。

美人さんは先輩と男の人と一緒にいる絵。

先輩のは青い澄んだ蒼空そらに何かが浮かんでいる不思議な絵。

恥ずかしいけど自分のも改めて見た。

ビンに黄色い花に花瓶に葡萄ぶどうがあるシンプルな絵。よく見ると荒削りだと思う……。色はゴチャゴチャしてるし、物も立体的じやくてきじゃない。

私の絵つてまだまだ未熟みじゅくだなつてよく分かるくらいに。

「星野さんの絵、それだよね。前と同じ、優しいよ

「そうかなあ？　未熟すぎて飾るのが恥ずかしいよ。でも、隼人は優しいね。ありがとう。もっと上手くなるように頑張るよ！」

隼人は一瞬固まると顔を片手で隠しながらどこかに行く。

あ、あれ？ ビうじたんだわ？ 変なことでも言つたかな！？

「ハハロー！」

後ろに抱き付かれるような感覚があり、後ろを見ると千恵が抱き付いてた。

美咲はのんびりと絵を見てる。

「ハハロって隣席の男の子と仲いいね……。羨ましいな～」

千恵は隼人のことになると寂しそうにするなあ。

隼人がどうかしたのかな？

千恵はそつと離れると作り笑いを浮かべて真琴と何やら盛り上がる。

「この2人は仲良くなれるよね。性格が少し似てる気がするよ。

「席について下さい！」

体育館に凄く響く。マイクで喋らなくても聞こえるんじゃないかなあ。美咲と千恵は4組の列に急いで戻る。次は4組か……。大西はどうしているんだろう……。

「ハハロ。大西ね、役してるみたいだよ

真琴が席についていたずらつぽく笑う。

いつも思うけど私って分かりやすいのかな？

それとも顔でてるのかな。舞台を見ると背の低い男の子が立っている。少しきせのある髪に細いのに筋肉がついてる体。大西だってすぐに分かった。服というか衣装というか……。私服っぽい。

でも演技は個性が出るらしいから大西らしさがよくでてる。ギクシャクした歩き方。苦い表情。なんだか可愛いしくて目が離せない。男子に『可愛い』なんてダメだけど……。

少ししたら大西が舞台にいなくなる。ビリやで終わつたみたい。もう少し見ていたかつたな……。

「うわあ～。4組、面白かったね」

「え？ ああ、うん。面白かった、ね？」

しつかり見ていなかつたから面白いか分からない。大西が可愛いかつたなら頷いて「そうだね」と言えるのだけど

「ああ～。口口口のことだから大西しか見てないんでしょ？」

「な！？ そ、そんなことは……」

否定は出来ない……。

だつて大西のこと本当に見ていたから……。

で、でも、認めるのも嫌だ。真琴に絶対にからかわれる。いや、真琴だけじゃなく千恵や美咲にも。

だから少しの間、秘密にしておこう。この胸の熱い想いは。

「次は6組だね……。あー。緊張する……」

真琴は衣装に着替えながら裏舞台に行く。私は背景係で背景を塗るだけだったから別に緊張はしないけど、真琴は役をしてるから緊張もするもんね……。裏方は裏舞台で見るだけだから。うん。劇が始まると真琴はすぐに舞台に立つ。裏舞台でそれを座りながら見る。

「星野さん。」こんなところにいたんだね

「え。隼人？　あ。そうか。隼人はナレーターだよね？」

隼人の手にはマイクが握られている。おまけに片手には台本がある。ナレーターは台本見れるから楽、なんだよね？

「星野さん……。あのわ……」

「へ？　どうかしたの？」

暗くてよく見えないけど何か言おうとして言いつていいのか迷つている様子に見える。言いにくいのかな。

「僕……星野さんがーー」

「おい！　隼人！　ナレーターの台詞だぞ！」

隼人の言葉はかき消されてよく聞こえなかつたな。『僕は』までしか。小さい声だったから。大きな声でもだめかもしねいけど。

「あ……。ごめん！」

隼人は謝ると台本を見ながらマイクを顔に向けて声を出す。

それから少しして6組も終わると先生の話や後片付けをして、教室に戻つて給食。

隼人と話しながら給食を食べるとなんだかドキドキした。意識しちゃつた……。裏舞台の暗い時に隼人の顔を見たらすごく男らしくて。男前がさらに男前になつたような。心臓に悪いです。本当に……。

one sided love-8 文化祭（後書き）

次回は29日更新です。順番に更新していくと思っています。
29日に更新したら次は28日に更新。一年生の時の秋は次回で終了です。

「口と棲みやつと絡みます。
隼人は出ません。
美咲と千恵がたくさん出るので友情要素が盛りだくさんのような
感じです。

部活は今日、あるかなあ……。文化祭が終わつたばかりだからな
いかもしれない。

先輩にも逢いたいし……。とりあえず美術室に行つてみようかな。
言いたいことも沢山ある。

美人さんにも「上手かつたです」と言いたい。早く、逢つて言
たい。

「ハロウヰヤン? ビーツだの? 部活ないよ?」

「せ、先輩!」

ふわふわの髪をいつも結つていてるのに今日せまねじっていた。肩
につくつかないかぐらこの髪の長さ。結つてもつぶし長いと
思つていた。

「先輩は髪をおろしたんですね。似合つてます」

「あ、ありがとうございます。ハロウヰヤン、本物可愛いくー!」

ぎゅっと抱き付かれる。せき込むと腕の力を緩め
てくれた。

それでも手をほどこうとしない。

先輩の様子がおかしいから不安になる。

「本当にハロウヰヤンが大好き……。妹が出来たみたいで……。
いひしてこられるのも今までだね……」

震えてる手。泣きやうなほどに弱々しい声。

先輩は……何を言つてるの……？ 今までつて最後つてことへ、どうして……そんなことを言つて……？

「私も……もつすぐ受験だから。三年生はもつ引退なんだよ。運動部の方がはやく引退するけど……。文化系も今日で引退。今までありがとうございました。」口ひかりんも頑張つて、

先輩と逢えなくな……？ あんなに沢山喋つて沢山恋愛について教えてもらつて……。話したいことがあるのに、言いたい言葉は出ない。頭が白い絵の具に塗りつぶされたように真っ白。先まで先輩の顔が見れたのに今は先輩の顔がよく見えない。滲んでいく……。

「もひ……。そんな顔しないで。まつたく逢えないわけじゃないから。学校ですれ違うかもしれないし……。卒業したら遊びに来るから……。だから、その……」

先輩が励ましてくれているのは分かる。

でも先輩だつて……泣きそうな顔、しますよ……？

先輩にお礼を言いたいのに出てこない。「ありがとうございます」とこいつ言葉。

でも……言わなくちゃいけない。声が震えていたつて泣きやうになつたとしても。

先輩に感謝しますから。感謝の言葉くらい伝えなきや……。

「先輩……。ありがとうございます。私も、先輩のことが大好きです」

声が震えて情けないな……。顔はきっと涙のあとがあるだらう。

先輩はにつこつと笑うと耳に顔を近付ける。な、なんだろ？
何か言つのかな……？

「ハハロちやんの恋も……叶うといいね」

……え？ 恋なんてしてませんよ？

先輩はうつすらと笑うと彼氏さんと一緒に帰つていった。泣いたばかりなのにまた涙があふれていく。逢えないわけじゃない。話せないわけじゃない。

けど……先輩の恋を見てから少し羨ましくなったのに。

「ハハ……。先輩……」

その場にしゃがんで声を出さないように我慢する。幸い人がいないので人目を気にすることもない。

「…………何してんの？ 目立ちますよー」

…………氣のせいだらうか。誰かさんの声が頭上から聞こえた。声は知ってる人。

まさか……アイツ？

でもこんなところにいるはずがないよね。とつぶに帰つているはず。

「聞いてんの？ 星野ハハロ」

「な！ ふ、フルネームで！ 大西 栄！」

顔を上げると大西が私をじっと見ていた。大西はなんでここにいるの…？ 美術室に用事なんかないはずなのに。迷つた……とか

ないよね。うん。

「お前だつてフルネームじゃねえか。……それよりこんな廊下で泣かれたら迷惑ですけど?」

「泣いてなんかない!……どこが泣いてるの!?」

ムツとして言い返す。泣いてはいたけど……大西が来たからすっかり涙がなくなつたよ。

「ふうん。泣いてないならいいけど。お前はいつも笑つとけ!
笑うかどには福来たりだぞ?」

心配……してくれてるの?

大西は口は悪いし意地悪だし……。
でも、いざという時優しいんだよね……。小学生の時、アレルギーで目が赤くなつたら心配してくれた。優しいから大西は人気があるんだなあ。

「あ、ありがと!」

「それになあ。こんなんで落ち込んでたらこの先やばいぞ。引退なんて気にしたらダメだ。俺らなんて……もうとっくに先輩はいないんだから」

大西は顔を少し歪める。あ……。悲しくないわけないんだ。
私が落ち込んでいるから慰めてくれたんだね……。ごめんね、大西。元気を出さなくちゃいけない。
いつまでもうじうじしてられない!

「あー。星野。お前、隼人と……その、あの——」

「棗——」

階段から柴崎さんが下りて来て大西の腕をとる。

大西は言いかけていた言葉をやめると柴崎さんに顔を向けた。困つているような迷惑そうな……なんともいえない顔。

「棗ー。こんなところにいたんだー。4組にいなかつたから焦つたわよ」

「しば、柴崎……。悪いけど先に行つといってくれない？ 星野と話したいんだ」

柴崎さんは私を睨み付けて大西の腕を引っ張る。え……。大西と柴崎さんの距離が近い……。

大西は柴崎さんをじっと見ているし、柴崎さんは私を睨んでいる。イライラする……。田の前でそんなことしなくてもいいのに……。

「何言つてるのよ棗ー。 部活まで時間ないのよー。 話なら私が聞いてあげる！」

大西は私を見たが目で「助けてくれ」と言つているのは氣のせい？ 柴崎さんと仲がいいんだから柴崎さんに聞いてもらつたらいいと思つ。

わざわざ私に話す必要なんてないと思つし。

「じゃあね。星野さん」

柴崎さんに腕をとられながら大西は歩いて行つた。胸の奥が棘に

刺されたように痛い。苦くて酸っぱい、蜜柑のような想いが広がる。
最近、こんな想いが多い。

柴崎さんと大西が一緒にいると蜜柑のような想いになる。気にしてもしようがないか……。

でも、なんだか歩きたくない。美術室の前にしばらくよ。

「ハハロ。どうにいたの~？」

美咲が階段から下りて私の前に立ち、すっと手を握られた。
美咲がなぜここにいるんだろう。

千恵はいないのかな。先に帰ったとか？

「どうして……そんな顔してるの~？」

美咲が小さな鏡を鞄から出して私に渡す。鏡で自分の顔を見ると泣き出しそうな顔……。悲しいことなんてないのに。
どうしてこんな顔してるの……？

「……。大西だね~？ 大西も女の子泣かせなんだから~」

美咲……。冗談はきついです……。

大西じゃないよ。

大西のことでなんで泣かなくちゃいけないの？

「こんな時は千恵だよね~。千恵になら話せる~？」呼んで

くるよ~」

千恵……。大切な友達。

なんでも言える、なんでも話せる友達。本気で泣いて笑ってくれる親友……。

「いた！ 二人とも…………え？ ハハロ、どうしたのー？」

「千恵、ハハロと話して。私はそのへんうわづらじてるから」

「

美咲は鞄を背負つと離れていく。

千恵はそれを見たあとに私の隣にゆっくり座る。

そつと髪を撫でてくれた。指先から千恵の優しさがあふれてる。

「…………ハハロ。言いたくないなら言わなくていいけど、いつから涙が出たの？」

「お、大西が……柴崎さんと一緒に部活に行つて……せつかく大西と、話せたのに……また、話せなくなる。そしたら……涙が出てよ」

千恵はハンカチを差し出してくれた。涙をふきとり、落ち着かせるために深呼吸を繰り返した。

千恵に話したら楽になつた。心が軽くなつたのかな……。

「悔しかつたんだよ、きっと。大西を独占してるその子が羨ましかつたのかな」

そう、なのかな？ 確かにもやもやしたけど……。
どうして柴崎さんが、つて思つたけど……。独占されたから？
大切なものを？
大西を？

「混乱してるならいいの。まだ気付かないのなら仕方ないけど、認めるのも勇氣だからね」

何、を？ 気付かないのは何に気付いてないの？ 認めるつて何を？

千恵がいいたいことは「恋」のこと？ 大西が好きかもしないって思つたことはあるけど……。時々、胸の奥で何かが叫びそうなほど想いがあるのは知つてるよ。だけど、それが恋なのかは分からぬ。それが今のは気持ち。

「帰るよ。部活がないんだからはやく帰りたいんだから」

その時の千恵の顔は切なげで悲しげな顔だった。

どうしてそんな悲しげなの？

千恵の方が辛いんじゃないの？

今の私には聞く勇氣すらなかつた。

美咲は階段に座つていた。待つてゐる間、宿題をしていたらしい。

「帰るの～？ もつ少し時間かかると思つていたのにな～」

残念そうに宿題をしまつ。鞄を背負い、立ち上がる。

千恵は美咲を見てため息をつく。

どうしたんだろう？ 美咲、変なことしてないと思つけど。

「美咲……。あんたはいつものんびり屋さんよね？」 テキパキしてゐる人を見習つといいんじゃない？」

「むう～！ のんびりかもしれないけど、これがちょうどいいんだもん～！」 テキパキすぎてもダメだと思つけどな～」

「Jの2人のやりとりが面白くて好き。ずっと変わらないやりとり。次はどんなやりとりをするのかな。握っている鞄をもちながら千恵に笑いかけた。

「千恵と美咲のやりとり好きだ。いつまでも見てたいな」

千恵は少し顔が固まった。肩も小さくはねた。聞いたらやいけないことを聞いたかな……？

「そう、だね……」

千恵の様子がおかしい。今のは言っちゃだめだったかな……。聞きたいけど、聞けなかつた。

美咲は千恵の変化に気付いてないらしく、呑氣にしている。気にしてもどうもならないし、考へても仕方ないよね。気付いてないふりをしておこう。

「うわあ……。今日、風が冷たいよ~」

美咲が「ブレザー着ればよかつた」と言つたが、そんなに寒いかな？ 普通だと思うけど……。

「美咲は寒がりね。ブレザーは冬に着るもの。今着たら暑いに決まってる」

「む~！ 千恵、おかしい～！ 寒くないなんて～！ ねえ、口口口、寒いよね～？」

なんて言えばいいんだろう？

寒いか寒くないかと聞かれたら微

妙。冷たい風じゃなくて、微風のよう。

「寒くないかな。むしろ微風?」

「え~! ? ハハハまでひどいよ~」

美咲はふくつと頬を膨らませて私を睨み付けるように見る。

美咲は私より身長が低いから睨み付けられても可愛い。睨んでな
いように見えるのだ。

「美咲はいいよねえ。身長低いし可愛いし」

「千恵が高いの~! ハハハだつて低いし可愛いよ~!」

千恵がこつんと美咲をたたく。本当に2人のやりとりを見ると元
気になれる。

ずっと、見てみたいと思つんだ。

今回はどうだったでしょうか？

棗の慰め、柴崎さんの行動。慰めはやつてほしくない時とかありますが、好きな人ならどんな言葉でも嬉しいですよね。

o n e s i s s e d l o v e - 1 0 冬の訪れ（前書き）

ついに冬です！ 冬は切なさがありますよね。冬の海は特に。イ
メージカラーでいうと水色っぽいです。

冬は、苦手。寒いものもあるけど、なんとなく……切ない季節だから。

千恵が帰り道の時に言つた。冬が苦手とか言つたのを初めて聞いたので驚かずにはいられなかつた。

千恵は雨が嫌いなら聞いたことはある。雨の時、すぐ嫌そうな表情をしてるから。雨は、気分がのらないのは分かる。晴れが好きだけど、晴れすぎても暑いから、曇りがちょうどいい。

「ううー。寒いなあ……。はやく春にならないかな……」

「春かあ。春になれば中2になるね。後輩、出来るかな」

千恵は年下が好き。弟のようで可愛くみえるらしい。

私には弟や妹がないので年下と関わる機会なんてない。小学校の時は、交流会とかなんとかで、3歳年下の子と遊んだ。

でも、私と遊んだ子は元気いっぱいの男の子で、あちこち走り回るので、捕まえるのに時間がかかつた。田をはなすといなくなるので手を繋いでいたっけ……。

あの時は、走ることに必死だったから、可愛いなんて思う余裕なんてなかつた。弟がいたら、こんなことをしてたかな、と思つただけで。後輩がくるなら、女の子なのかな。美術部つて男の子いないから。

「口口口！　なに考えていたの？　私の話も聞いてほしかつたな」

「え、あ、『じめん。年下の子つてどんなかなつて』

千恵はしづらへ田を空中に彷徨わせてい、ぼんやりした。年下のことは、いつも楽しそうに話すの。

「弟は可愛い。大きくなつたらぜんぜん可愛くなじけどね。後輩が出来たとしても、それほど小さくないから、可愛いと思わない」と私は思うな」

「千恵は弟、2人いるもんね。後輩の相手とか得意そりだから、よろしくね」

そう言つたら、千恵はうつむく。

また、だ……。最近の千恵はこれからのこと話をすると元気がなくなる。

まるで、自分がいなくななるよつと。元気がなくなるのは、千恵がいなくなるから?

そんなこと、考えさせない。

「千恵がぼーっとしてどうあるのー、元気じゃなきや、笑えないよ」

私に出来る励ましなんて、こんなこと。精一杯考えても、綺麗な慰めなんて考えられないから。

千恵はしつづめていたが、にっこり笑つとまたいつものように、喋り出した。

「そうだね。笑えないね。先のことを気にしたりして、どうしようもないし。今を楽しまなきゃー！」

いつもの千恵。お姉さんのように大人びていて、優しい……。
たとえ、千恵がいなくなつても、繋がることは出来るから。樂しい思い出を、今だけでも……つくれり。

「じゃあ、また明日」

私の家に着くと、千恵は手を振りながら帰つていいく。後ろ姿をずっと見ていたが、寒くて立つていられないので、家にそそぐと入つた。家には兄がパソコンをいじりながら宿題をしていた。パソコンに夢中で私に気付いてないのだろう。

私は部屋に入つて私服に着替えた。制服つて動きにくい。ブレザーは着ていたら身体が重く感じる。

「ハハロ。今日は早かつたのね」

「ん……。お母さん? 買い物してたの?」

玄関から顔を覗かせる母。父はまだ帰つてきていない。

いつも夜中に帰つてくるけど。母も夕方の6時から仕事に向かう。6時になるまで買い物やら掃除やら洗濯やら……。皿洗いは私が担当。母がここまで頑張つているのだから、せめて水仕事をはやってあげたい。

「今日は部活ないからね。今日の『飯なにー?』

「ん? 今日はね、ひじきに唐揚げに野菜の炒め物に、魚の煮付けよ。栄養、バツチリね」

うわあ……。兄ちゃんが好きなものばかり。ひじきは私とお父さんが好きだけど、魚は私以外みんな好き。魚の煮付けは苦手。揚げ

物なら好きなんだけどなあ……。

「 ハハロは野菜も食べなさいね。身長伸びないわよ」

「 ……小学生に間違えられたからって。童顔だと言いたいの?」

身長もあるだらうけど、顔が幼ことよく言われる。小学生に間違えられても文句は言えない、と。

よく間違えられるけど……そんなに言わなくともここのこな。身長が伸びないので親の遺伝かもしれないし。

私はお母さんを部屋から出すと椅子にもたれた。今日は……疲れた。部活もないんだけどな……。ひとつひとつの田を瞑る。いい夢、見られますよ!」。

「 ……あて、早く。早く、起きなさい……」

誰がいるの? 耳の近くで聞こえる細い声。厳しめの令子だ。おしゃめな声は……こつも聞こてる声だ。眠い……。もう少し寝たい。

「 千恵ちゃん、来てるわよ。待たせるつもりなの?」

「 お、母さん……? もつ朝、なの?」

くしゃくしゃの髪を撫でながら聞いたり、呆れたように見られた。時計を私に見せぶりにして、田原まし時計をたたかれた。時計を

見ると……完璧に遅刻。用意は急がなくちやー。

「早く着替えて髪を整えなさい。時間がないし、千恵ちゃんも待ってるから、早くしなさいね」

私は洗面所へ向かい、洗顔してから歯を磨く。制服を着て、ボサボサの髪をくしで梳かして鞄を持ち上げる。朝ご飯を食べてるひま、ないよね。

千恵を待たせてるんだもん。待たせたくない。

「ハハロ！　遅いー。相変わらずなんだから」

「『めん！　寝坊しちゃって……。これでも急いだ方なんだよ』

千恵はくすくす笑いおえると、私の頭をみてまた微笑した。髪の毛がどうかしたのかなあ……？　急いでやつたからまだはねてるかな？

「ハハロ、髪がはねてる。動かないでね、なおしてみるから」

千恵は手櫛でおしてくれたが、髪の毛先だけはねたまま。癖毛だから諦めではいるんだけど、もうちょっとストレートにしてみたいとは思つ。みんな、さらさらしてストレートで羨ましいもん。

「ハハロ、最近太った？」

「ええー？　うわわ……。ダイエットしようかな……」

確かに最近、肉がついたかなっては感じてたけどー。

やつぱり太つてたんだ……。揚げ物ばかり食べてるからかな……。
太つた姿なんて、見せられないよ！

「冗談だよ、冗談。口々口が体重氣にするなんてね。前は全然
氣にしなかつたのに。大西を好きになつてから変わったよねえ」

「違うー！　年頃だから氣になつただけで……。大西はまつ
たく関係ありません！」

千恵のばか……。

そんなこと言つたらまた意識しちゃうじゃんか！
私の考へていることを知つていて言つてるの？　わざとなの？

「口々口……。もう認めてもいいんじゃない？　いつまで、
認めないつもり？　みんな、辛くても頑張ってる。逃げるの？」

違う。否定したい。

でもそう出来ないのは、心のどこかで認めてるから。
私が恋を認めないのは、辛くて傷付くのがこわいだけかもしね
い。こわい、辛くなることが。変わつてしまつ……変化することが。
私だけ、美咲や千恵みたいに恋話したい。惚気話だつてしてみ
たいんだ。

でも……」わくて出来ない。矛盾、といえばそうなのかもしぬな
い。

「認めるのだつて勇氣だからね。私は全力で口々口を応援する

「うん……。ありがとう、千恵。頑張るから」

認めるね、と言いたいけど私にはまだ勇気が足りないから。時間

を下さい。頑張つてこの想いを育てるよ。

だから、それまであたためさせて。初恋は、人生で一度しかない。初めての想いを、大切に、壊さないようにしてみたいから。

「星野さん、おはよう」

隼人が席について挨拶をしてくれた。

隼人とは仲が良かつたけど、文化祭をきっかけに距離が近くなつた。女子たち……隼人ファンは私に目を光らせるけど、隼人とは友達なんだもん。何の進歩もしないし、下がるわけでもない。

第一、隼人から話しかけてくるので、私は遠慮しなくてもいいと思つんだけど……。

「おはよう。そうだ！　あのね、隼人……。文化祭の前の約束、覚えてる？」

「ああ……。僕を描いてくれるんだよね？　今、描いてくれるの？」

いたずらっぽく笑つた隼人はかわいらしい。普段、にっこり笑うと爽やかな笑顔で、女子たちが騒いでいる。いたずらっぽく笑う姿は、女子の前では見せない。

私が見れてるんだ、と思うとなんだか嬉しいような。

「隼人がいいなら……。文化祭が終わつたから、暇になつちゃつた」

「そつかあ……。そつだなあ。僕も部活暇になつてきたしなあ。今日、顧問の先生が出張なんで休みだから……。放課後、教室で待つてくれない？」

「いいよ。

そう返事をしたら、隼人は嬉しそうに笑つた。

隼人の笑顔つてなんていうか……キュンとする？　キュンつて漫画みたい。

私も部活はない日だから、帰つても暇だし。休み時間に美咲と千恵に言つておかなくちゃ。今日は先に帰つててね、と。

五時間目が終わつて、すぐに教室を出て4組に向かう。4組に行く時つて、なんとなく緊張する。普段、4組行つてないからかな……。

「ココロ～？　逢いに来てくれたの～？」

「あ、美咲！　ごめん、今日先に帰つてて！　私、用事あるから！」

美咲は嫌な表情をなにひとつしなくて、きょとんとした表情で、分かつたよ、と頷いた。何も聞こじしないので、よかつた……。

「じゃあ、先に帰つてるけどね～、用事つて槇野くんでしょ～？　千恵に言つたらヤキモチやくなえ～」

「ええ!? 知つてたんだ……。千恵がヤキモチ? まさかあ~」

千恵のヤキモチねえ……。

隼人と関係あるのかな?

隼人の話をすると千恵は、いつも寂しそうに笑うから。知り合いには見えない……というか一人が話してるとこうなんて見たことない。

私は美咲に手を振りながら教室に戻り、放課後を待遠しく感じていた。

o n e s i s d e d l o v e - 1 0 冬の訪れ（後書き）

約束までなんとか書けました。冬は運動部、辛そうだなあ……。
夏も辛いと思つんですけど、運動するなら秋ですね。

やつとここまで書けました。のんびりなのか、早いのかは分かりませんが、□□口の認めないシーンは意外に苦労します。好きじゃないつて想定、上手く書いてみたかったんですよね。

授業終了を知らせるチャイムがやけに大きく響いた。今日の授業は……これでお終いかあ。疲れたあ……。

「今日はここまで。次の授業までにちゃんと予習をしてくるように」

社会の先生が教科書を閉じると、クラスのみんなも同じように片付け始める。

私も片付けようと教科書や地図帳を机に押し込む。中から出たのは、大きめなスケッチブック。あ……。そつか。

隼人を描くつて約束したんだつけ。すっかり忘れてた。楽しみにしてたんだけど、社会の授業で眠たくて……。あくびなんでしたら絶対に怒られるから睡魔との闘いだった。授業内容は全く聞いてなかつた。

「星野さん。眠いのに頑張ったね」

「ふああ……？ 隼人？」

どうして知ってるのかな……。

私つて分かりやすいのかなあ？

隼人が鋭いとか、そんなのじゃないのかな。

「星野さん、授業中に頭がゆらゆら揺れてたから……。うとうとしてたし」

「んんー。社会つて苦手で……。頭に入らなくて

少し前まで頑張つて聞いていたんだけど、そのうち分からなくなつて……。言い訳にしか聞こえないよね、これじゃあ。

「星野さん。」のあと、大丈夫?」

「全然大丈夫!　掃除して、挨拶が終わつたら描くから!」

隼人を描けるといつことに眠氣は吹つ飛ぶ。本当に楽しみで仕方ない。

私は掃除場所に向かう。廊下なので少し冷えるが、ひんやりとした空氣にほんのりと心地良さを感じる。ほうきを持ってゴミを掃いていると、柴崎さんと大西が仲良さそうに話しているのが目に入つた。もやもやする……。痛い、見たくない。一人を見たくない……。一人に背を向けて気にしないように、掃除に集中した。

ぼーっとしてたらすぐに放課後になつた。嬉しいはずなのに、喜べなかつた。心配かけたくなくて、隼人の前ではなるべく笑つてみせた。

「どこまで描いた?」

「え、あー……。まだ顔の輪郭しか描けてない」

五分も経つのに、輪郭しか描けてないってどういうことなの、私は失礼すぎるよ、モテルになつてもらつてるのに……。

「体調、良くなかった？　今度にする？」

「大丈夫だよ。そんなに心配しないで」

再び描こうとした手を隼人に強く掴まれる。痛いわけじゃないけど、力が強くて振り払えるはずがない。

「嘘はダメだよ。今日は家に帰つてゆっくり休んで。また別の日に描いづら。ね？」

「…………」

不満そうな表情をして隼人は意見を変えようとはしない。渋々頷いて、教室を出ようと/orして隼人を見た。にっこりと笑つたかと思つたら、独り言のように呟いた。

「僕は諦めないよ。僕の想いに気付いてくれるまで、ね」

なんのことだろう？

私に向けたのか、単なる独り言なのか。体調が優れないのも本當なので軽く頭を下げる。帰り道を一人で歩いた。ズキズキと痛む胸をおさえて、目を瞑つた。

「私の、ばか……」

やつと氣付いた、本当の気持ち……。目を逸らしてた、熱い想い……。立ち上がりつて、親友の家に向かつた。

千恵の家つて、相変わらず遠い……。肩で息をして乱れを整える。必死で走ってきたからか、髪の毛はあらゆるところがはねてまわる。

る。

でも、髪を気にしてるひまじやない。

千恵に言いたいことがあるんだから―― 家に足を踏み入れると家の中はがらがらだ。どうしたのかな……。

「おや、ハハロちゃん。千恵に何か用かい？」

「あ、おじさん。こんなにちわ。千恵…… いますか？」

おじさんは「待つててね」と笑うと階段を上つていった。待つてゐる間、おじさんが手に持つていた茶色い箱……段ボールを見た。どくどく、と嫌な予感がさつきからずっと頭の中に流れる。勘違いだよね、千恵……？

「ハハロ、どうしたの？ 珍しいね」

「千恵！ あの、ね……話したいことと、聞きたいことがあるの」

場所を変えようか、と千恵が言つたので私は千恵の後ろについていく。人目が少なく、秘密話にはもつてこいなのかもしれないな。

「んーと。話したいことから聞こつかな？」

「う、うん！ 私、やつと分かったんだ……。私ね、大西が

好き。恋なんか分からぬ」けど、やつ思ひなんだ……」

柴崎さんと仲良くしていようと、ついで嫉妬して、話せると嬉しいのは……大西に恋してるからだと思った。今日でその思いが確信に変わったから、千恵に伝えたい。

「自分が恋だと思ったら、それはもう立派な恋なんだよ！」

につこりと笑つて千恵が髪を柔らかく撫でてくれた。

「で？」

「う、うん。私の勘違いならいいんだけど……千恵、なんで家の中の家具とかないの？ ひ、引越しとかじゃないよね……？」

笑つて違うよ、と言つて千恵。勘違いだよつて……。

二息見ると目を瞑りやうとさせた和の言ふことを聞いたのだが、疑つからぬ。

「あーあ。ばれちゃつたか。さすがに分かるよね、私の態度とかにも出てたと思うし。引越しなんだよね」

嘘じゃないの?
本当なの?
嘘だつて言ってほしかつ

た
・
・
・
。

私が「行かないで…」って言つてどうにかなる話じやないのは分かつてゐるけど、でも……。

「ねえ、口。恋つて気付いてどう思つた？」

「え？ 確か……。こんなに辛いのかなあって」

あれ？ 本当にそう思つた？ 辛いだけじゃないよ。楽しいことや嬉しいこともあつたはず。確かに、大西が柴崎さんと仲良くするのは嫌だと思つし、そんなことを思つてしまつ私自身も嫌だつた。

でも、この想いは譲れないから……。
だから私は、頑張つて成功させたい。

「私ね、もしかしたら……怖かつただけかもしない。周りのみんなのよつに傷付くのが怖かつた。恋に臆病になつてたんだ」

「うん。それに気付いたら、もう大丈夫。口口口は口口口らしく、焦らなくともいいからね？」私も応援してるから

ぎゅっと千恵に抱きつく。

千恵はいつも応援してくれてたんだね。
だからいつも私に、恋してるつて気付かせようとしてくれたんだ。
私、全然気付いてなかつた……。

「ありがとう、千恵。私は頑張るよ。大西に振り向いてもらえないかもしねりだけど……後悔しないためにも、精一杯のことほしいたい」

「それでこのコロコロ！ それに私、夏休みとかに逢いにくる
し、手紙だつて書く。だから悲しがることはないんだよ？」

そつか……。

そうだよね。手紙だつて書けるし、逢いにだつていける。一度と
逢えないってわけじゃないんだ。

「それじゃ、私は手伝いがあるから。口も早く帰った方がいいよ？」制服のままだし

あ……。無我夢中だったから家に帰らないでそのまま来ちゃったんだ……。

これは寄り道だなあ。

でも早く帰らないとすぐに空が暗くなっちゃう。

「うん。帰るね。また明日」

「また明日！　あ、口口口」

足をとめて顔だけ千恵に向ける。

千恵はぱたぱたと駆け足で走つてきたり、くすくす笑いながら呟いた。

「挨拶とかしなきやダメだよ？」大西にも、槇野にも

槇野？

槇野って……隼人！？

な、なんで千恵が知ってるの！？

私……隼人のこと、千恵に話したっけ？

「槇野は女子から人気があるから有名だよー。爽やか男子ってね」

ああ。

真琴も前に言つてたような……？

隼人は確かに爽やかという言葉が似合つ男子だと思つ。周りにき

りきりした光とか飛んでそいつ。

「じゃ、またね！ 気をつけてねー」

千恵がぶんぶんと手を振つてくれるの、私も負けないくらいに手を振つた。制服で、しかもこんな時間に何をしてるんだろうな、私。時間は六時を過ぎていいし。帰つたらきっと『ご飯が用意されてるだろ？』みんなは食べてるはずだから温め直さないと。冷えたご飯は好きじゃない。苦手な方だ。ぱさぱさして、美味しいねとか言えない。食べようと思つたら食べれるけど、普段は好んで食べない。好みがあるんだろ？

「ただいま」

返事は求めているわけじゃないので、早足で服を手に取ると、制服をハンガーにかけて吊つておく。ブレザーにしわとか寄せたくない派なんだよなあ……。

「ノーロ、『ご飯食べるだろ？』 今、温め直すな」

お父さんがおかげを持つて電子レンジで温め直す。帰つてきたばかりなのだろう。仕事着を着ていて、顔は疲労といつものが浮かんでいる。

お父さんが家族のために一生懸命なのは私にも分かる。だけど、なぜか好きになれない。幼い頃に遊んでもらつたことがないから？ 家にいてもそんなに会話しないから？ 私つてひどい娘だな……。

「はい。温め直したから冷えてないと思つが……。残さずに食べるんだぞ」

「分かってるよ。私も、もつ中学生なんだから」

箸を取つてホウレン草の炒め物を食べる。味付けは変わってないと思う。……うん。「」飯を食べ終えると、風呂に入つて布団に倒れ込む。今日は……いろんなことがありすぎて、疲れた。恋を認めたり、千恵が転校することを知つたり。疲れを癒すために目を瞑つた。

今日の朝はどきどきと胸が高鳴る。隣で歩いている千恵はにやにやと面白そうに笑つているし。

「あ！　あれ、大西じゃない？」

見てみると、隼人と並んで歩いている小さな影がある。
隼人と大西は友達であり、ライバルだと言つていたから仲良し。一緒に登校するよね。

「頑張れ！　ハハロー！」

強く背中を押されて、目の前にはにこやかに笑う隼人と、びっくりしたような大西の表現が目に映る。

「、ここで勇気出さなくて、この先どうするの私！

「お、おはよう……大西と隼人」

千恵が後ろで微笑んでいるのがなんとなく勘で分かる。挨拶も出

来なくて、この先の恋をどうやって頑張れるというのかな。見ているだけじゃ、きっといつか後悔する。見ているだけじゃ、満足出来なくなる。

大西はしばらくきょとんとして、瞬きを繰り返すと爽やかとはいえない、きらきらした笑顔で笑った。

「おはよ。星野」

その笑顔は隼人とはまた違う、綺麗な笑顔。ほんのりと頬を紅くさせて、嬉しそうな笑顔。

私が見てきた大西の中で一番好きな笑顔になつた。前に好きだったのは、部活の時の笑つた表情だった。夕日と重なつて、かつこよく見えた。

この笑顔をまた見たい。

これが大西と私の、最初の始まり。

「口がついに認めました。挨拶から始まるって素敵です。後悔したくないって思つて行動るのは良いことだと思います。私の場合はなかなか積極的に出来ないので、積極的な人が羨ましいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1162s/>

蜜柑色の君

2011年11月12日12時08分発行